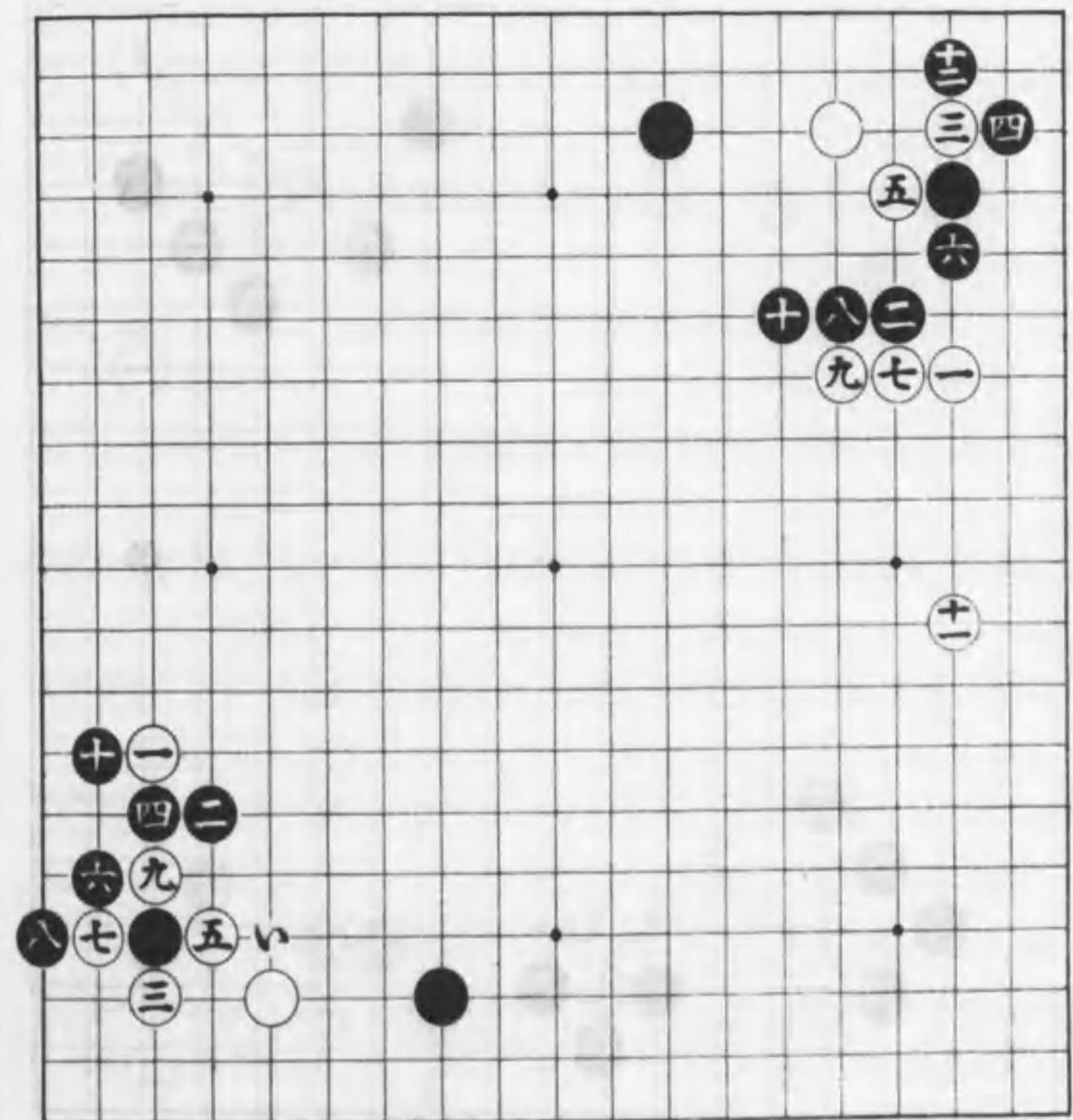


(第七十三圖) 一間夾第六十七圖と共通します。

若し得失を言はば、黒としては本圖の方が大きく包圍してゐる點は優つてゐませう。

左下隅も一間夾第六十七圖と全然等しく、たゞ九迄の白より二間夾が一路遠いだけに、その影響を受ける事少きは當然の理です。この點を主として考へれば一間夾の場合よりも黒が幾分有利の譯である。

なほ黒二にていと頂けられる征關係の有無に就いても一間夾と共通する。後の手拔定石に。

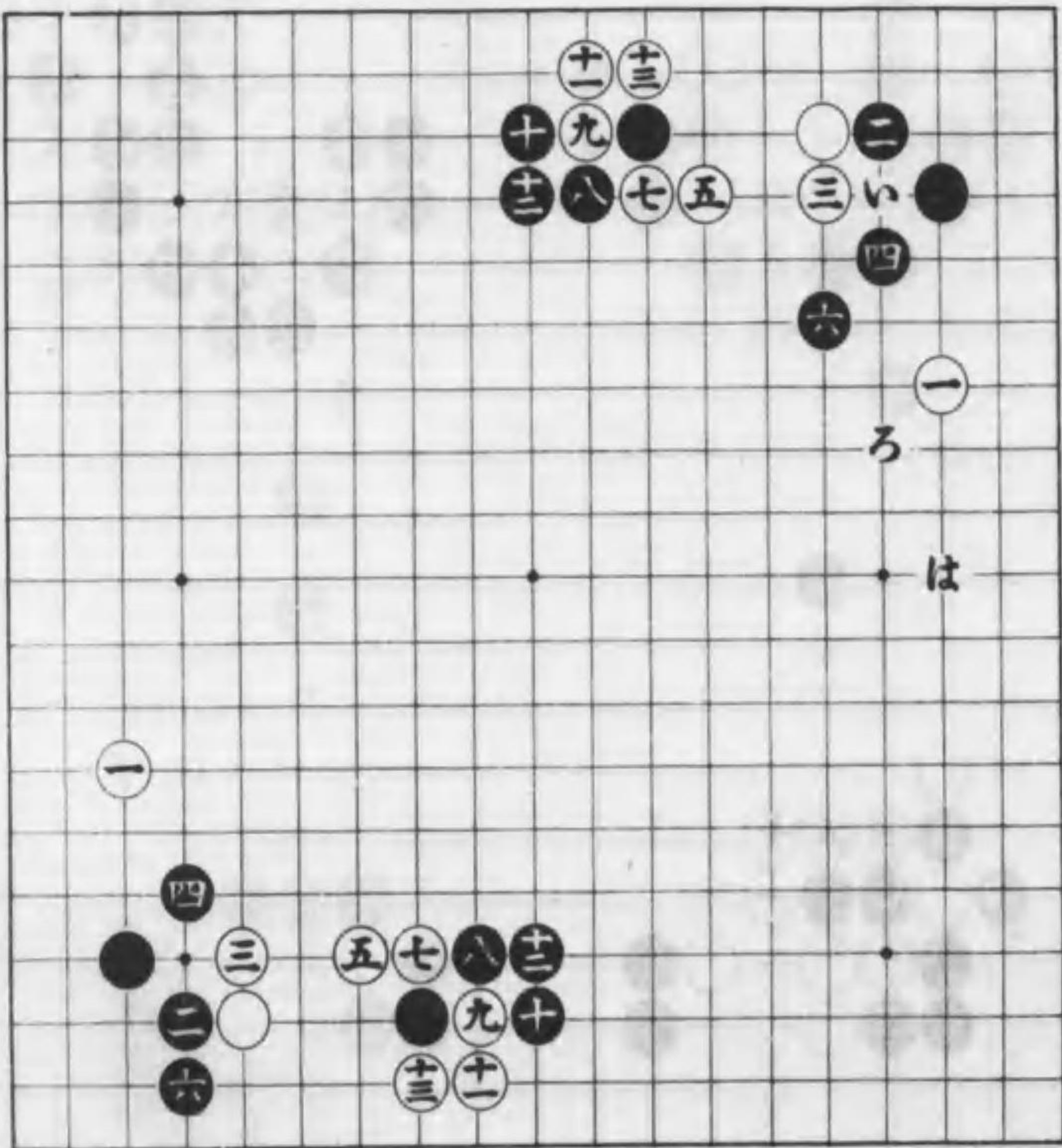


(第七十四圖) 黒二の尖頂を先

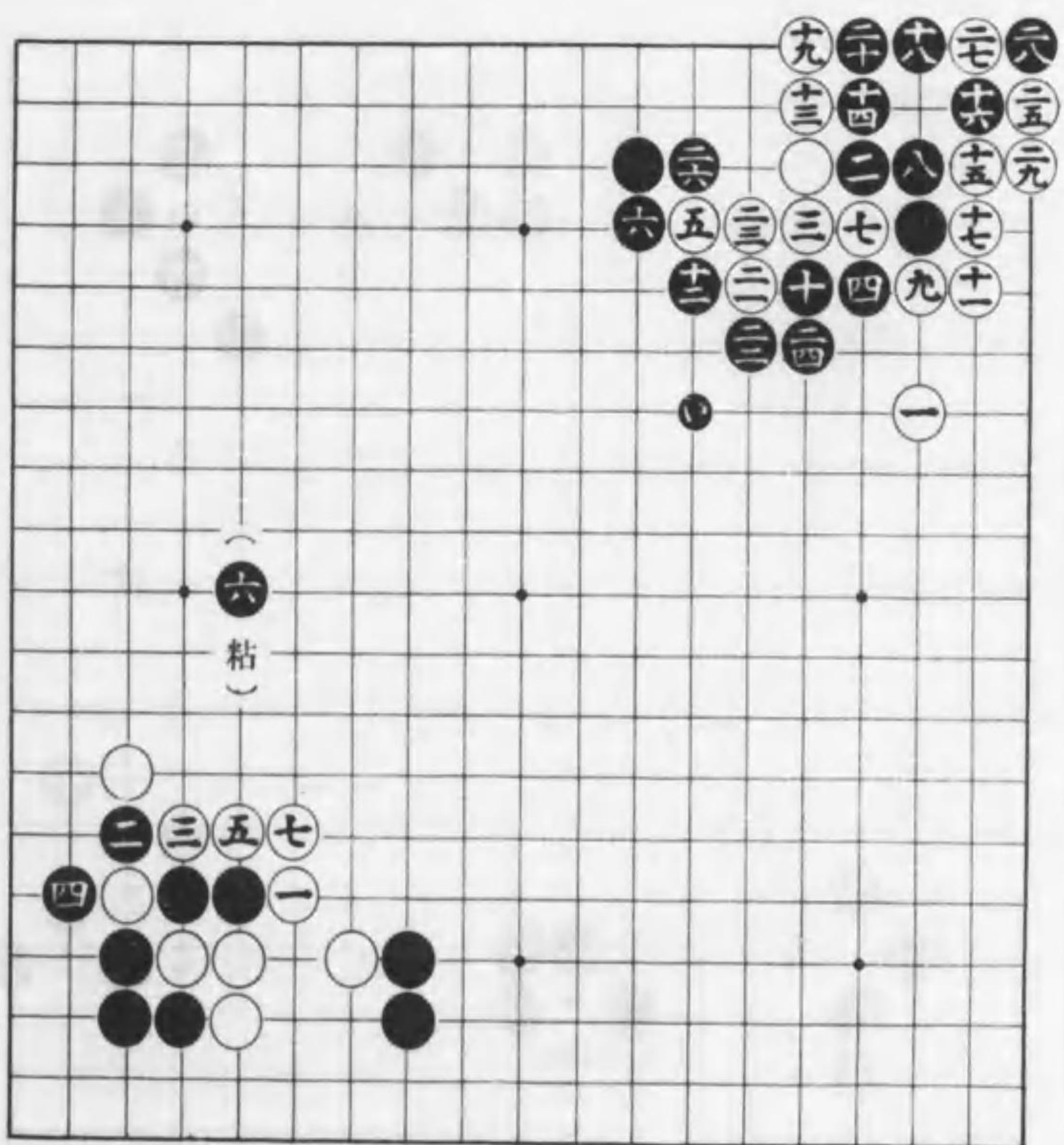
にして四と尖む型。白の姿を重くして置いて左右に擱んで打つ趣向なれど、正道ではありません。白五は決まり手です。いの差込と六の封鎖とを睨む。

黒八を九に引くは重い形です。以下十三迄となつた際に黒六が白の堅い處に尖出した形と化してゐるだけに面白くない。

十三の次に黒はろに掛るかはから夾撃するか形勢にて取捨する。左下隅黒六と下る事も出来ませぬ。この時にも白七と押して十三迄となる位のものです。

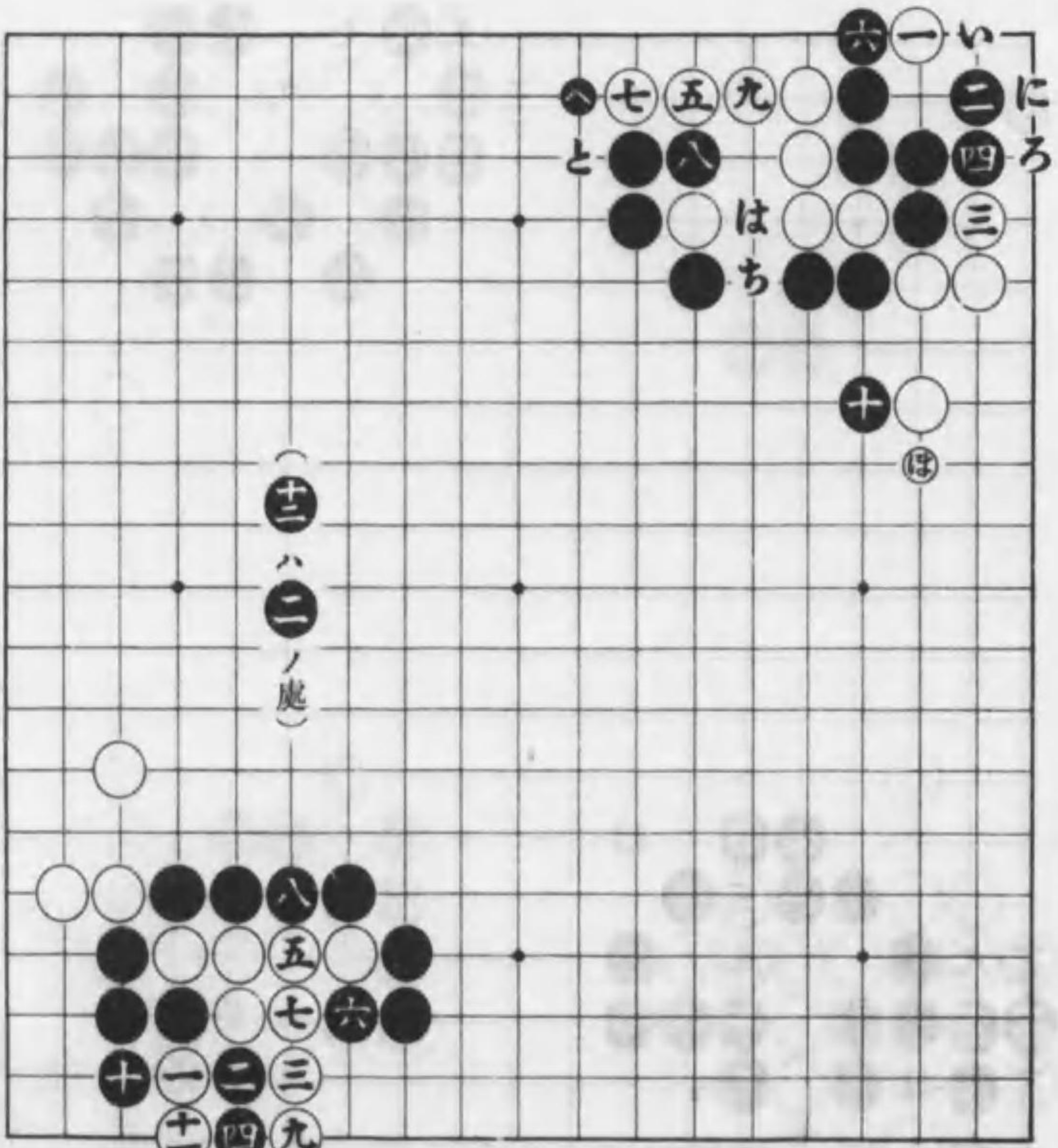


(第七十五圖) 黒六と押すのは無理に近い。白七より黒一二迄は必然の手順。  
 白十三を十四に縛る事の不可能なる所以は次圖左下隅に。  
 白十五では十八に置く變化も有ります。次圖に示す。  
 黒十六から白二九迄は勢です。茲で黒は●に補ふものと見ねばなりません。黒一手の寄劫ではあり得失の判定は形勢にも依るもの、黒有利とのみは言へぬ形。下隅は白十一の變化なれど、斯く三・五と絞つて簡単に始末しても打てぬ事はない理です。



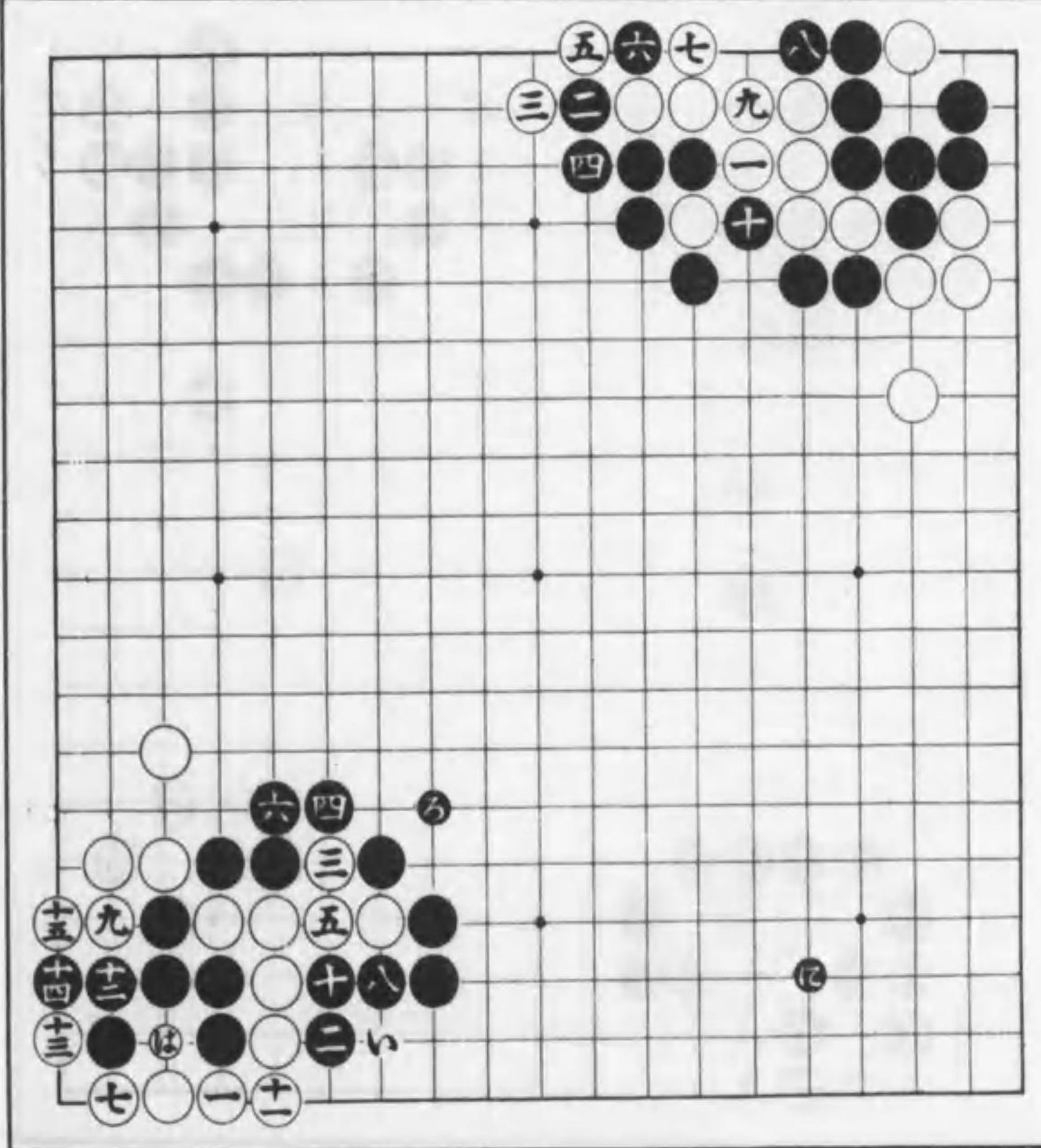
(第七十六圖) 白一の置は着理黒二を六に遮ると白四で黒が取られる事になります。  
 白三は次に五と飛んで手数を延ばす考へならば差支へ無けれど五にて六に盤る時には黒四との交換は打たぬを可とします。なほ次圖左下隅参照。

黒六を七に約へるは白六と盤られ黒い白ろ黒は白にて攻合黒敗。又白七に就ての注意は次圖に。黒十肝要。次に白●と黒●、孰れかを見合ふ。十で●に約へると白と及ちにて黒の破綻です。下隅は前圖土隅で言ひました。



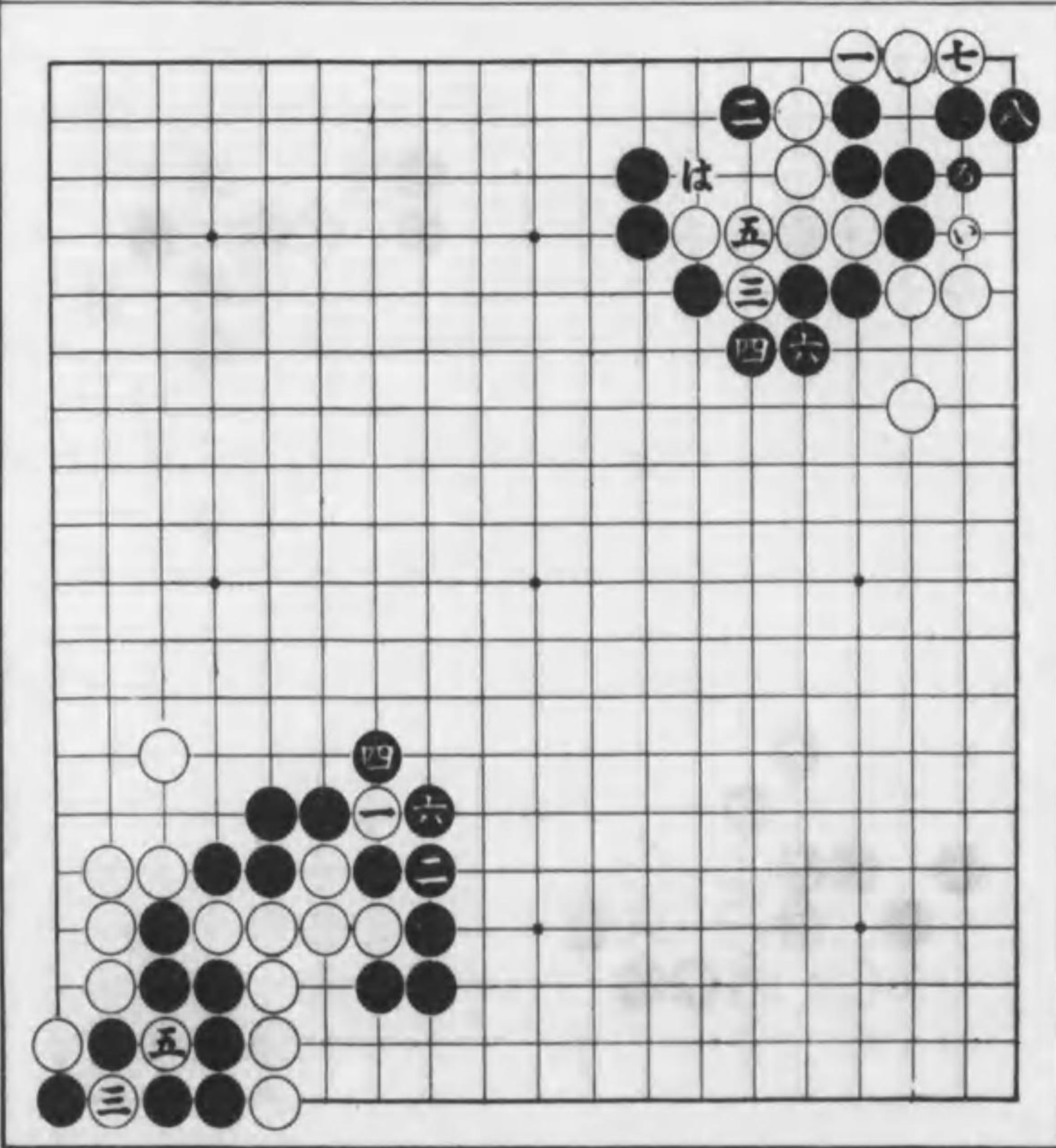
(第七十七圖) 前圖上隅白七にて一と突張つた形ですが、これは黒十迄で白の取られとなる。左下隅は同じく白三より變化。一と盤つた所からです。黒二肝要。五に緯込むと白いと飛ばれて黒がいけません。

白十五迄必然の手順。黒一手の寄劫なれど黒五に補ひ白六に打抜き黒七又其他に轉ずるとして手割上黒は悪くない形ですが是亦周圍の條件に依る事であり一概には言へぬ。白一に先だち白九黒十二の交換有らば黒八にて十三に下り、持を選ばれ白不利。



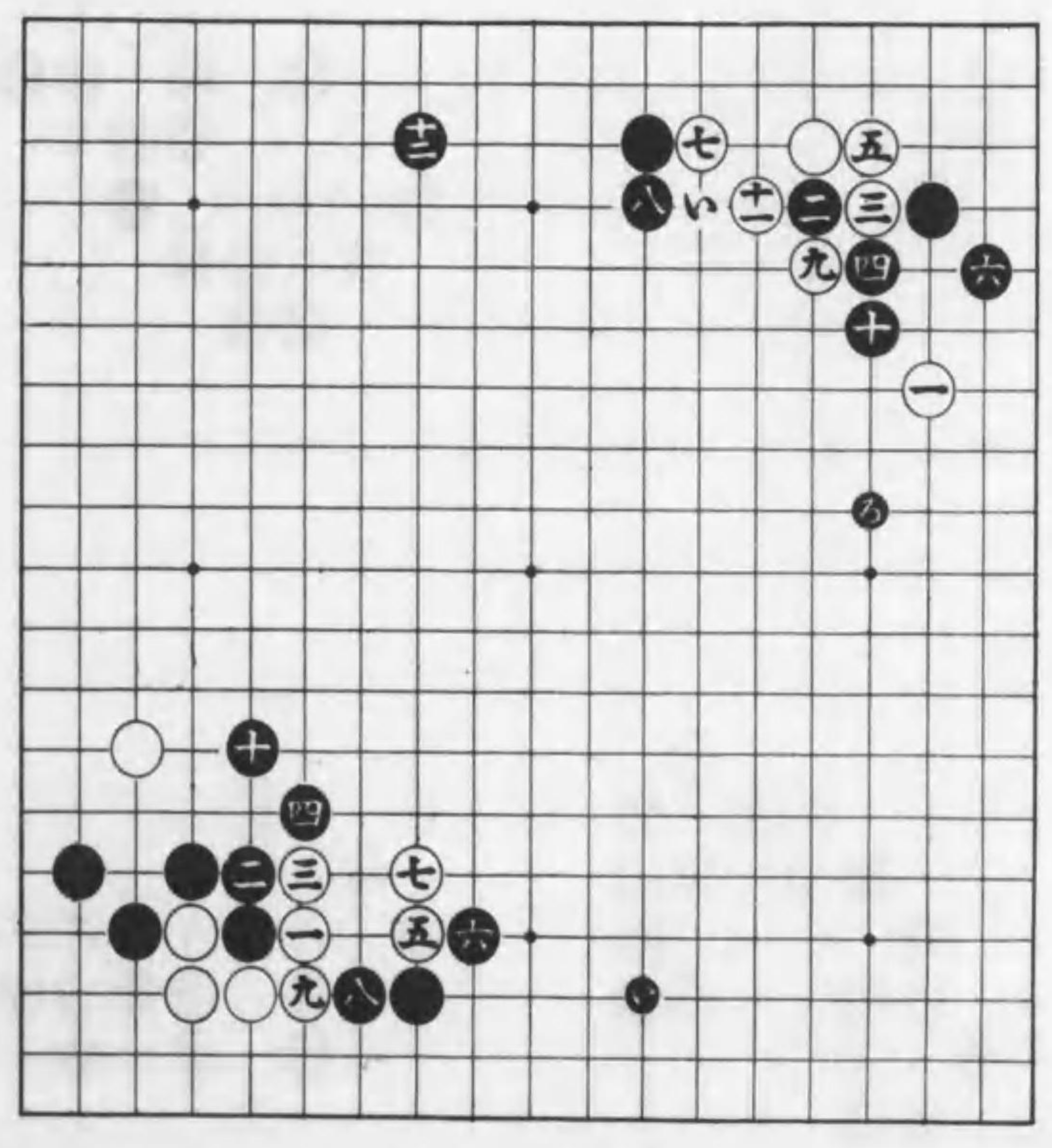
(第七十八圖) 更に前圖下隅の詳説です。白一、黒二の交換を先にして一と盤り、八迄の持となると三の方の白が眼の無い形だけに俄に薄弱を致し、手が略けません。而も黒八にてはに詰め前圖同様の劫とする事も出来るので、形勢に依て兩者の中を選ばれる點は白不利です。四の交換を先にしたからには前々圖上隅に従ふのでなければ不合理。

下隅は第七十五圖上隅白二九にて一と切つた變化。こんな歸結も考へられますが、これ等はまづ互角の別れと見られませう。



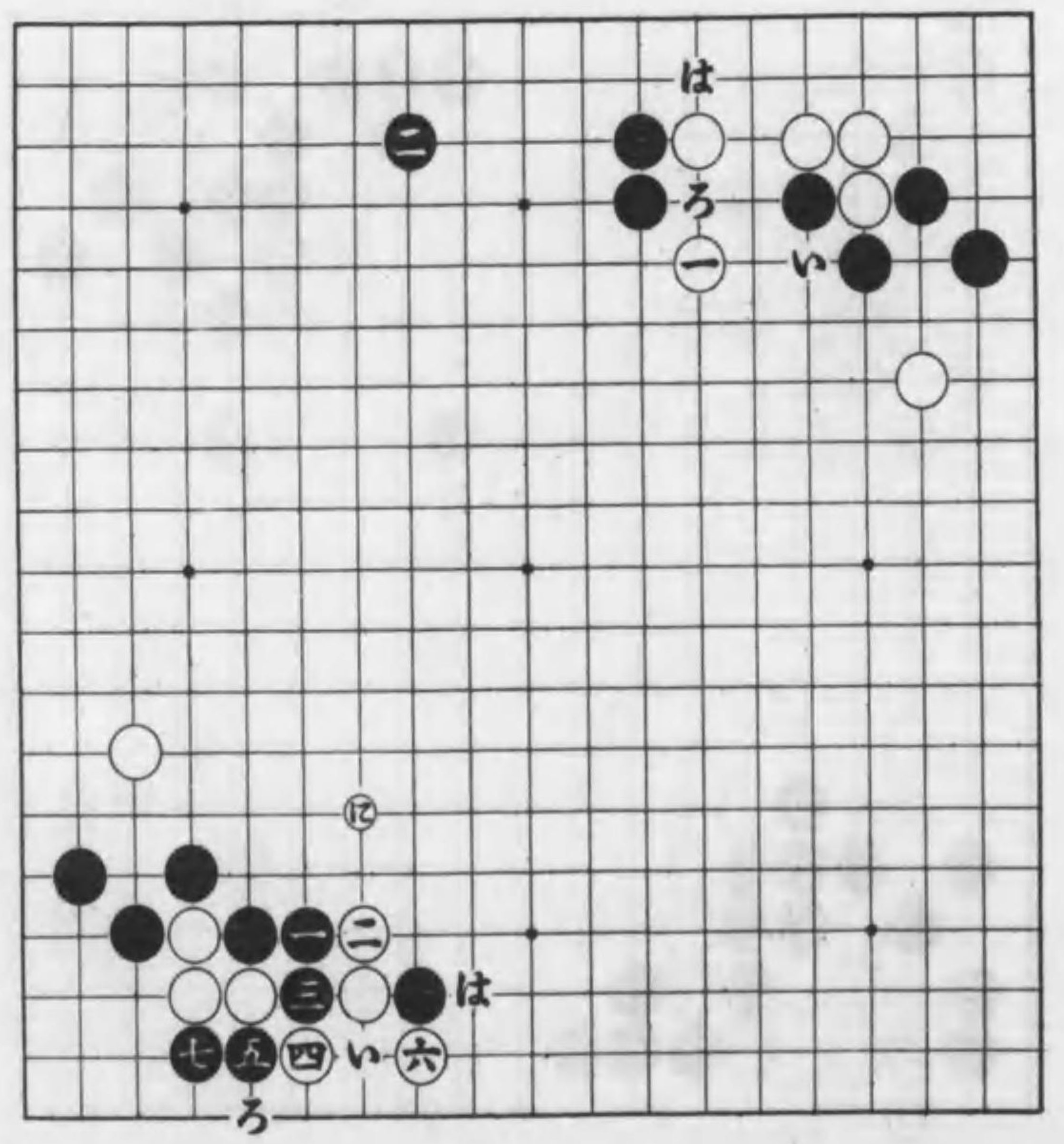
(第七十九圖) 黒二と頂る型に移ります。白三と縛込み得るか否か、其原理は一問夾第百四圖の所説と一致する。白一の夾返は此點を見定めなければ打てません。而して征關係の不利なる限り、黒二は四に尖むが本手。黒六は常用の手法ですが、六の變化に就ては次々に示す。

白七・九が手筋。黒十にて十一に出れば白いと押出すのです。黒十二は●を選ぶ事も可能。何れにせよ黒十分とは言へません。下隅白一も悪いとは限らぬ。黒十で●に拓くか否かは形勢次第。



(第八十圖) 白一にていに切らず斯く飛ぶも一種の形です。黒二は左上隅の條件に拘らず要點である。このまゝ一段落で、後に黒いならば白ろ又黒はならば白いと切ります。

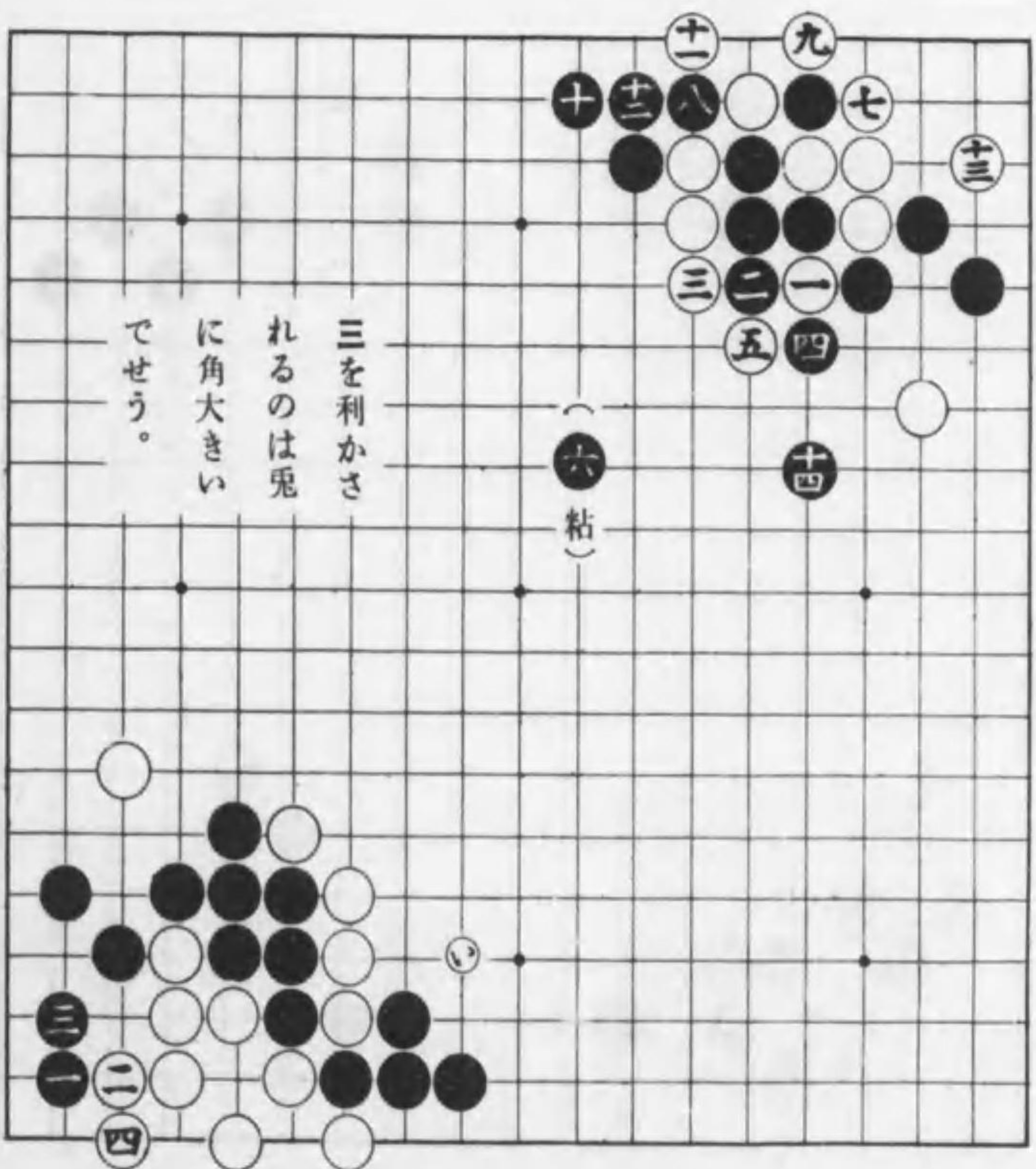
左下隅黒一と行出すのは筋違ひの意味が有る。但し白六にて七に抱へられた時黒い白ろ黒はの征が成立しなければ一自身が無謀の理。三子を捨てた白六は當然ですが、黒七の次に白⑫が好點であり、右下隅に白の配置でも有れば白大いに有利です。なほ白六の變化は次に。



(第八十一圖) 白一・三・五は七と抱へるための前提であり、征を消滅せしめる手段。黒六と粘ぐ愚形は辛いが、四にて五に行ると、白十三にて四に出られる惧れが有ります。黒十二迄は絶對。

白十三を省略しても活路は有りますが、左下隅の如くなるのも忍びない損である。

左下隅黒一・三を打たれるのは先手十目内外の損失。而も黒は治まつてしまふ。白が上隅十三の手で(イ)其他に迫ることは右下隅方面の條件次第ですが、黒一



三を利かさ  
れるのは兎  
に角大きい  
でせう。

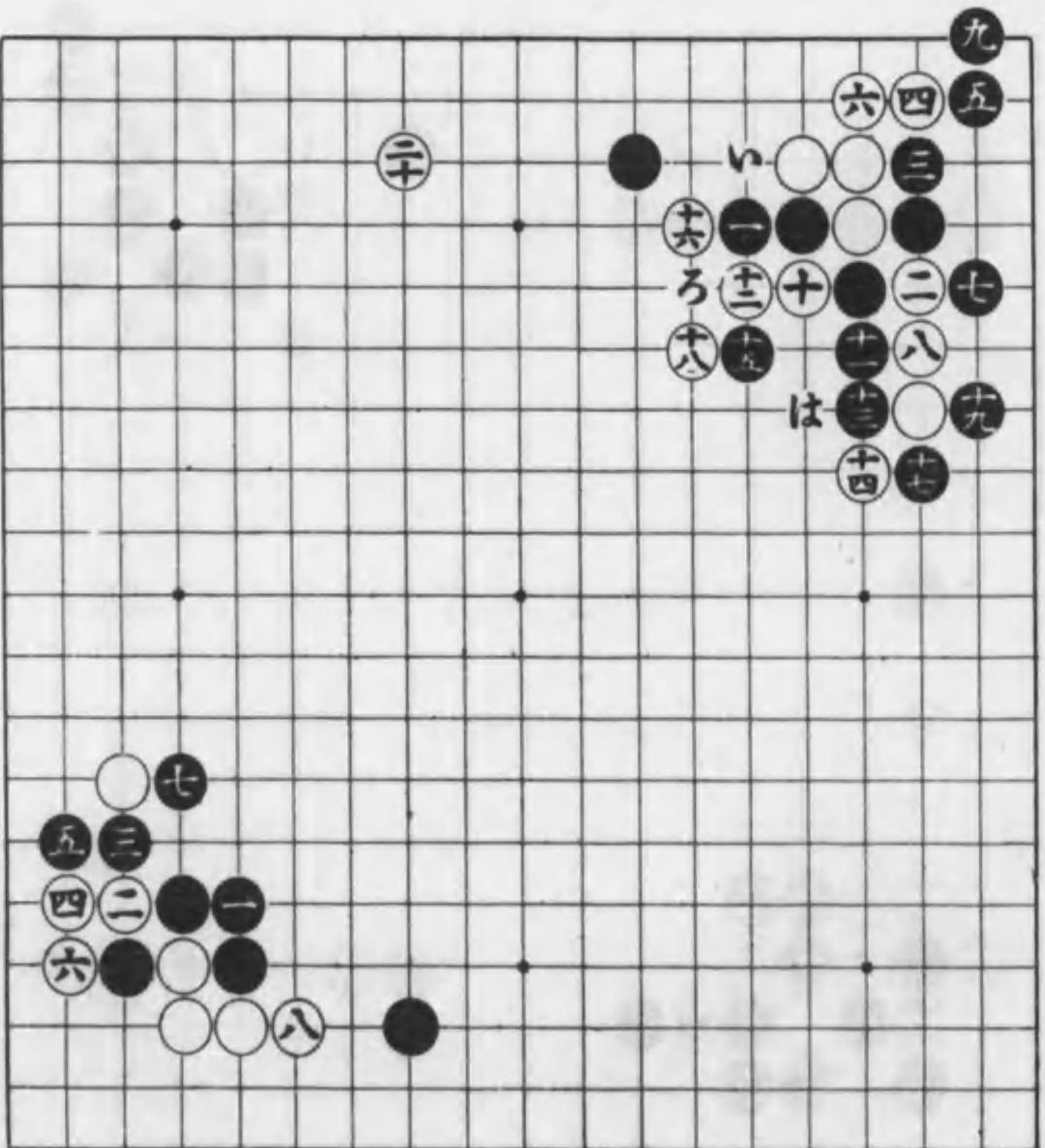
(六粘)

(第八十二圖) 黒一と行出すの

は白二と切られて無理のわけですが、全然成立しないこともありません。即ち黒十三にていに約込み、十一の方の二子を征に取られなければ成立する。

黒十九迄を餘義無くされ、白二十と夾撃される事になつては黒不利です。而も白十六にてろに行切り白はと追はれる征關係さへ考へねばなりません。要するに黒一は一般に無謀である。

下隅黒一と粘ぎ、白八迄の結果は二間夾の石が白の堅きに接して無効の位置に歸します。

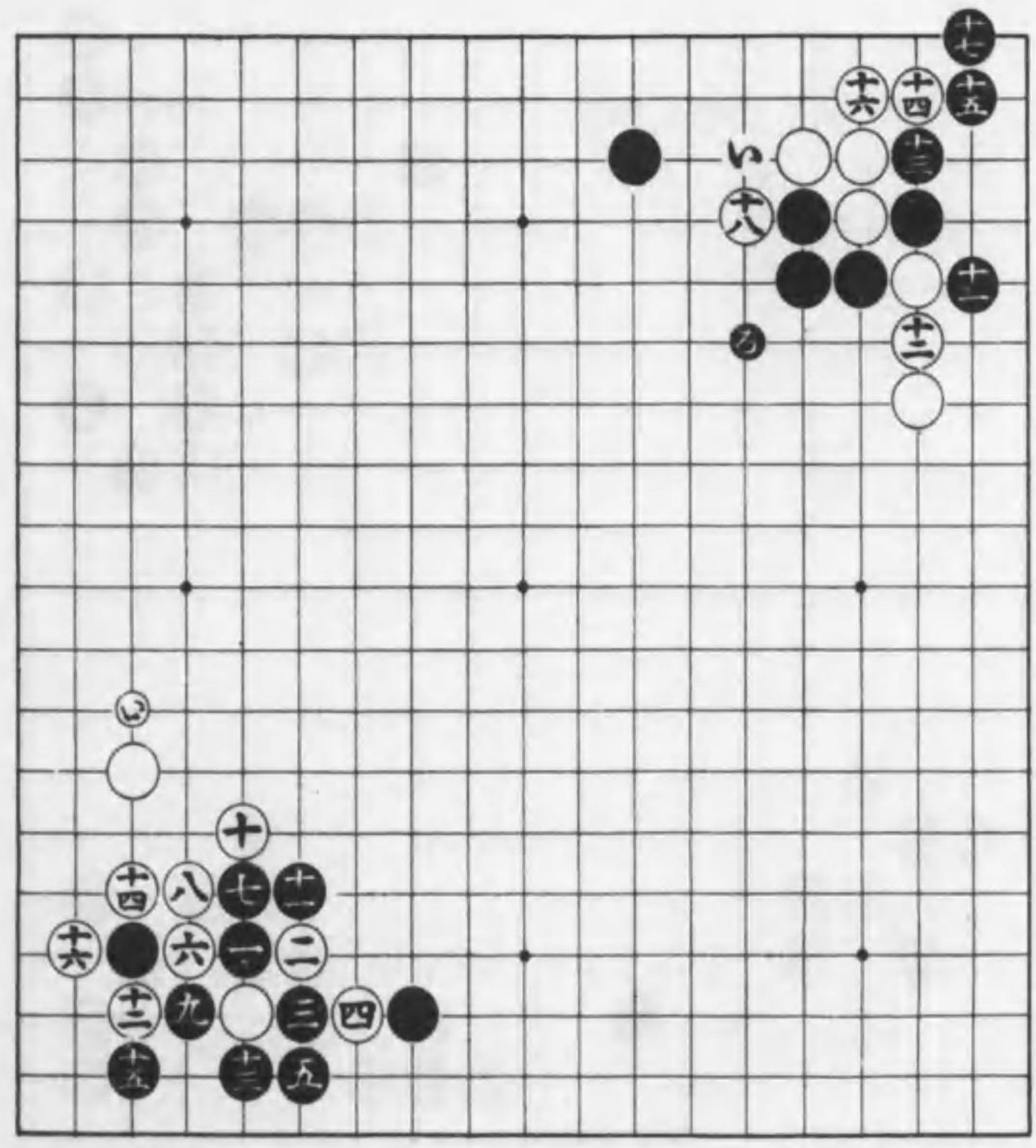


(第八十三圖) 黒十一以下隅に活路を求める變化

黒十七にていに約へるは無謀で  
すそして白十八の次に黒は●と  
尖む位のものですが前途に成算  
は持てない要するに十一は隅で  
活きても推奨できません

左下隅は第七十九圖でも注意し  
た征關係から白二にて六に縛込  
み得ぬ場合の型白二にて九に行  
出す變化は次に示します

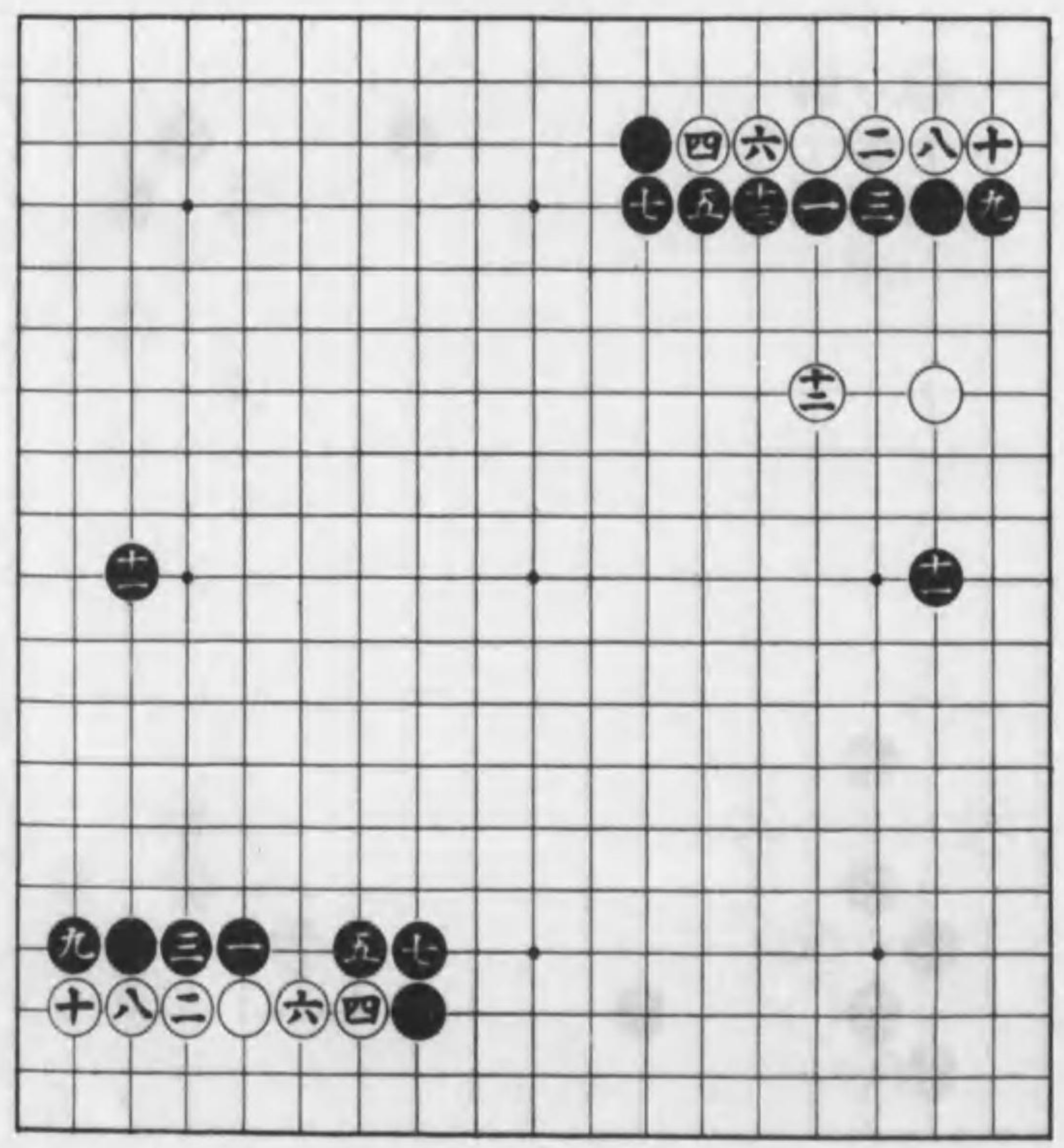
白十六迄必然の手順ですが斯く  
成て見ると白の二間夾返が働い  
てゐない。一路進んで●に在りた  
い所が白不利とされる理です



(第八十四圖) 白二と行出すの

も三に縛込めぬ時の一つの型。  
白十までは下隅に掲げる第百四  
圖の手拔定石でも示してありま  
すが二間夾の石が孤立して黒十  
一と夾撃される事になつては先  
づ白不利です就中黒十三は缺點  
を残さず堅壁を築いて本手

要するに白が初め二間夾返して  
置きながら二以下と活きる事は  
そこに氣分上の矛盾あるを否定  
し難い理となります。下隅と對比  
せば思ひ半ばに過ぎませう  
下隅の手拔定石に就ては第百四  
圖以降に詳説



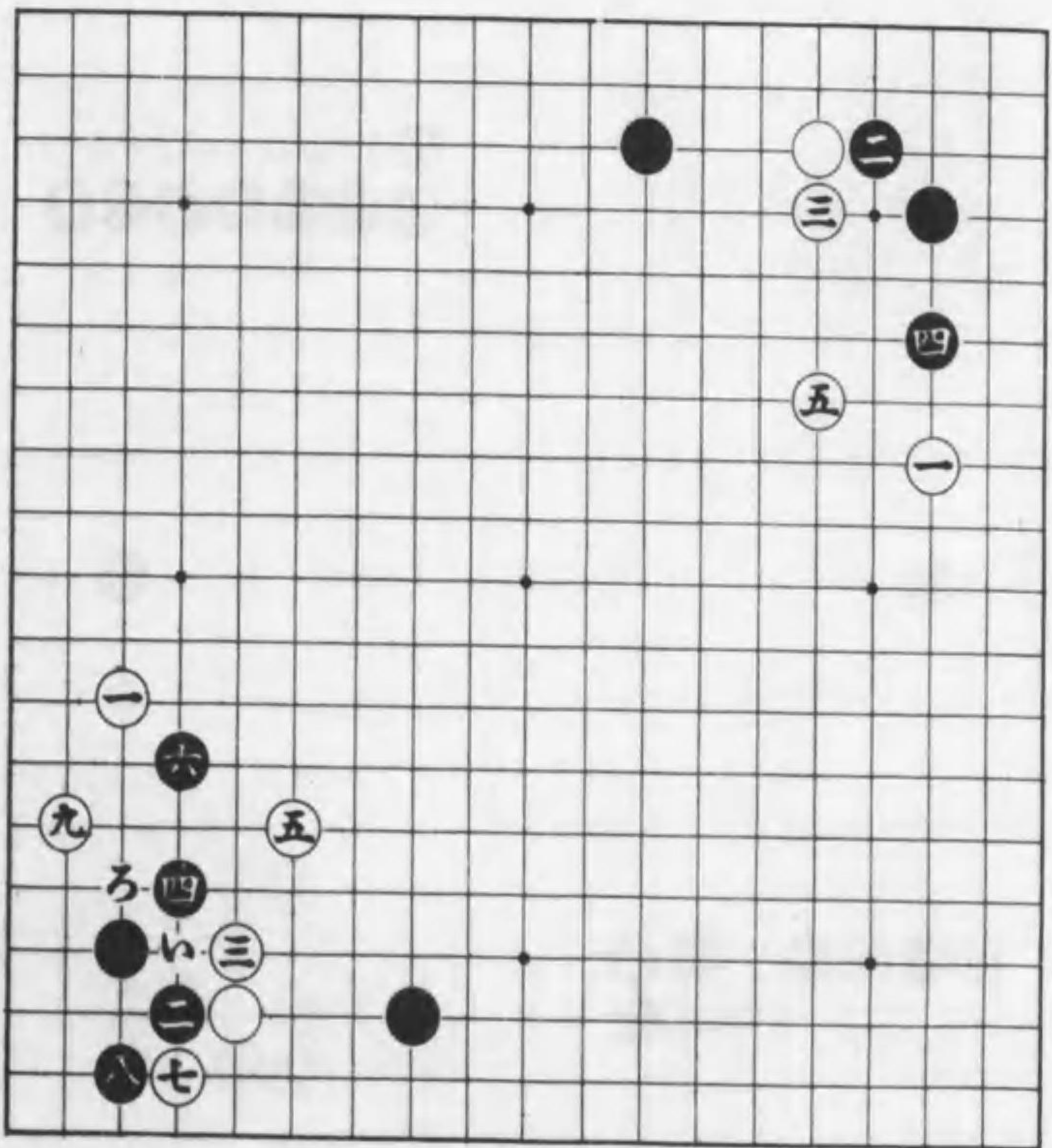
(第八十五圖) 白一の三間夾返

黒二は自他の根據に關し、白三と立たせて重くした後に四と詰めて治まります。

白五にて一段落然しながら黒の二間夾の位置が適切ならぬ事を否定出来ません。

左下隅黒四は左右の白に響かせる意味です。そこに上隅とは積極と消極の差があります。

白五黒六は當然として、白七九の手順は巧妙極まる白いろと切る意味を含んで黒の應手を問ひました。なほ手拔定石第百十四圖を参考とせられたい。

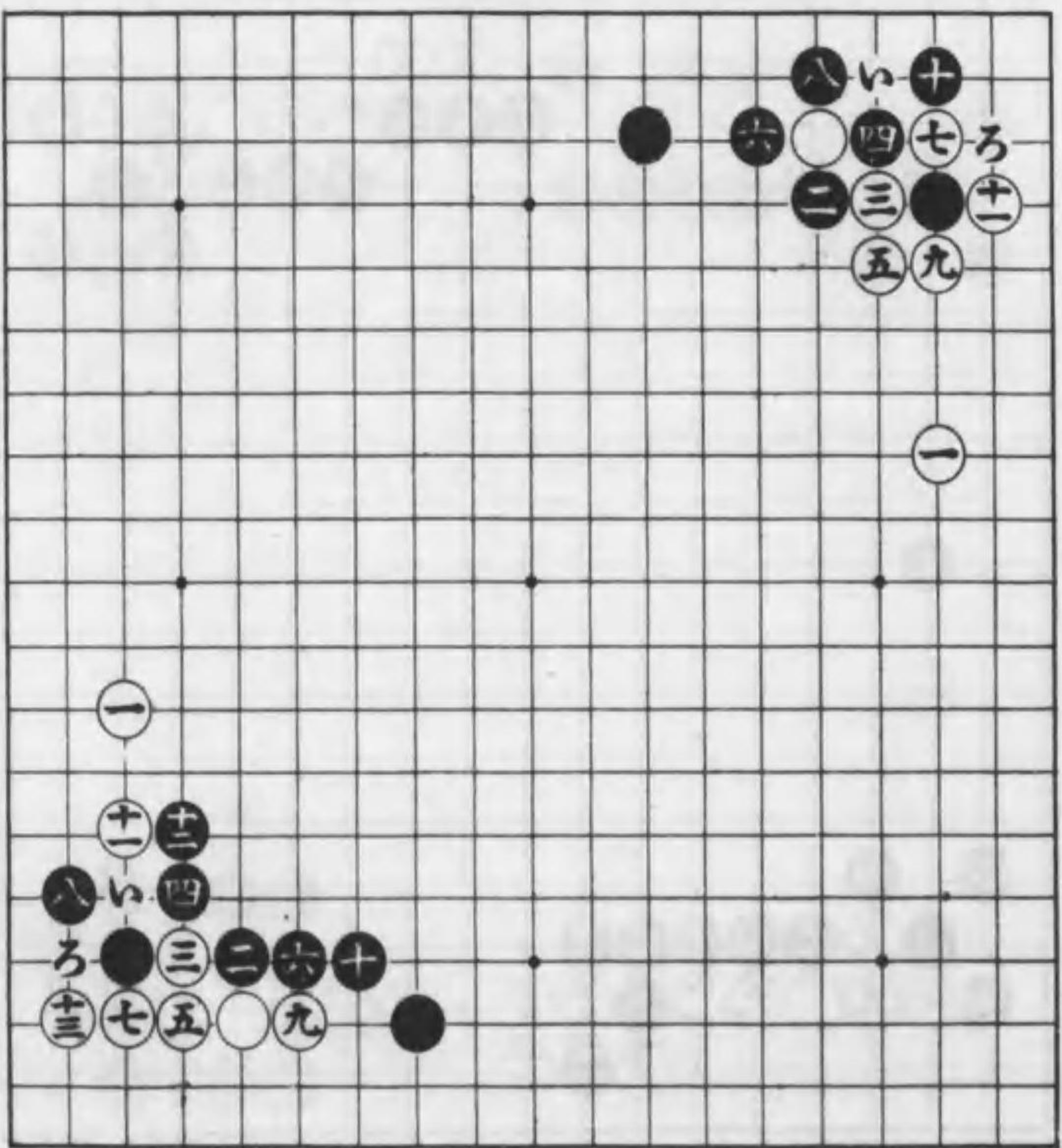


(第八十六圖) 白三と綽込み得

る場合にも拘らず黒が二と頂るのは、次に五から約へずに四と切つて六と振換る方針です。

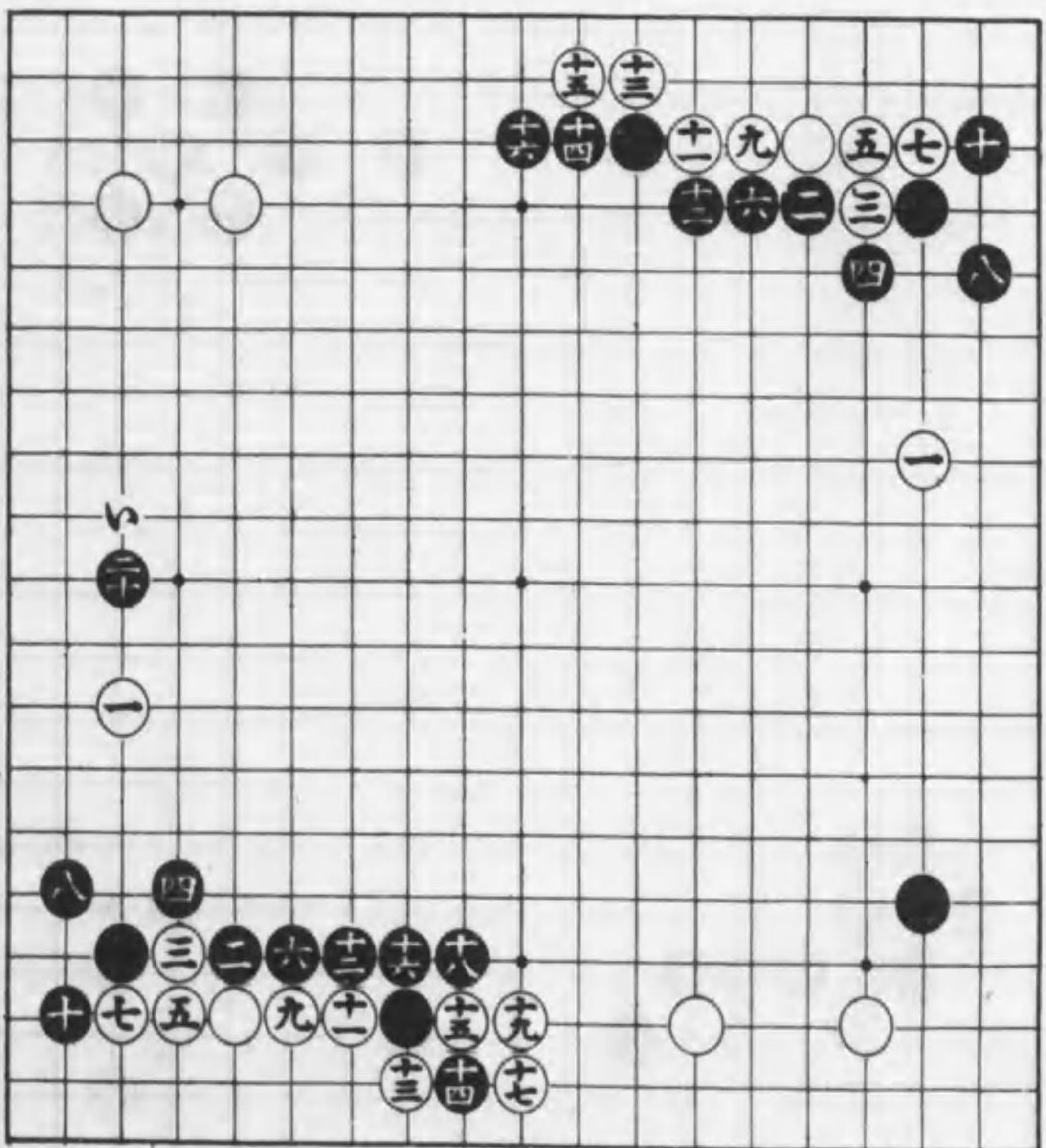
白九にていと當てられたらば黒ろと綽ねて極力劫を争ふ。此點は双方劫材の關係と共に見定めねばなりません。十一迄の結果白一が働いた點となつてみます。黒少しく不利の形。

左下隅黒四と約へれば一間夾第七十三圖と類型に歸します。黒十二にていに粘ぐの愚、白十三をろに當てはならぬ等の次第は全く等しい。



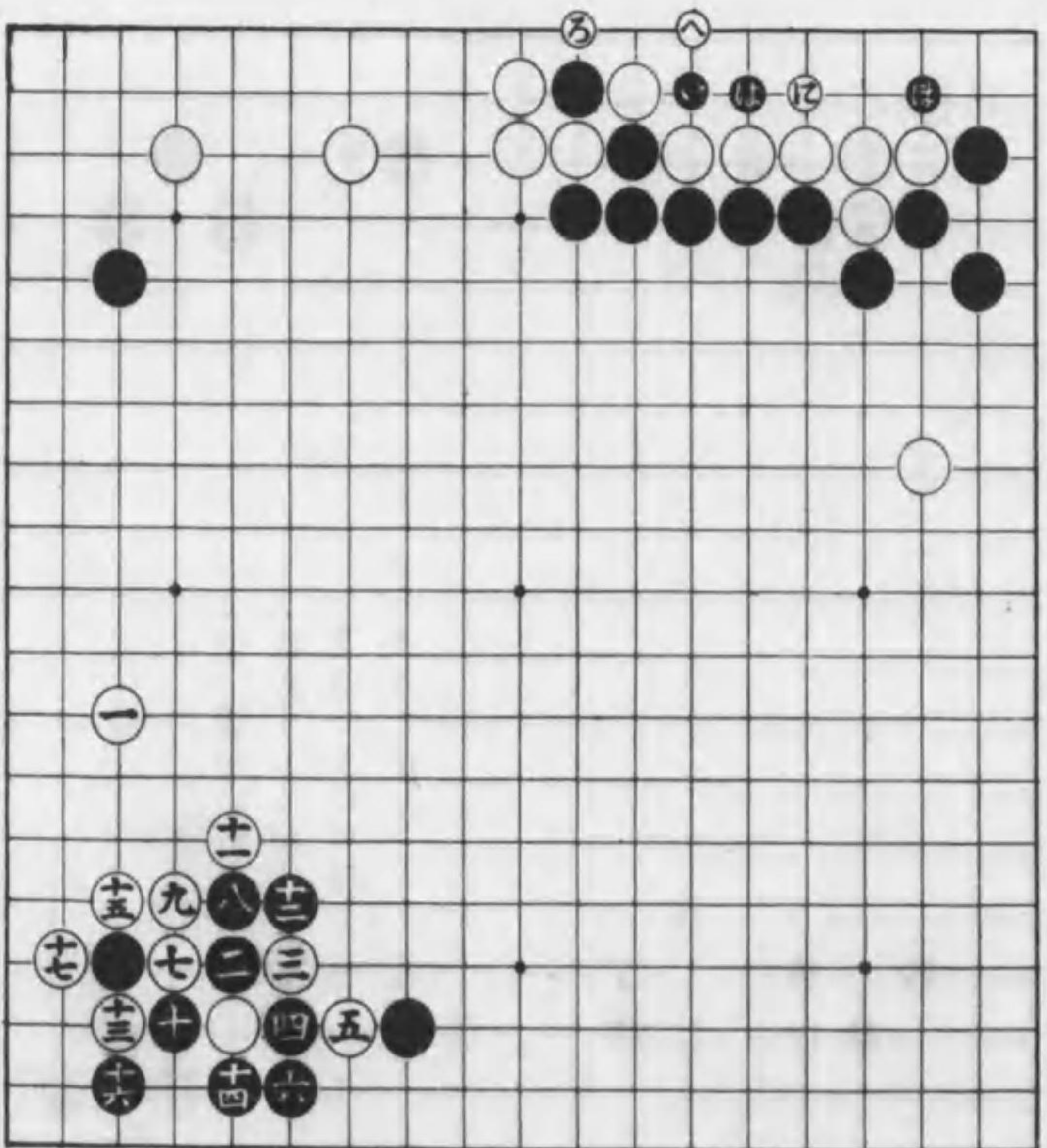
(第八十七圖) 黒十と竝で隅から掉るのは白十一以下を促して十四十六と行る趣向が有力なる場合たる事を要します。左上隅に白の締りでもあらばその勢力を減じて大いに面白い。

左下隅黒十四の二段綽は一層厳しい意味です。白を十九迄應ぜしめ先手を以て二十若しくはいと夾撃する。これが爲には右下隅方面に圖の如き白の低い配石あらば最も適切その姿勢を低く重複せしめる點において黒は理想的です。初め白一にて考へねばなりません。



(第八十八圖) 後に黒よりは以下を利かせ得る先手の侵分が残る事は前圖左下隅の遺利と見られます。

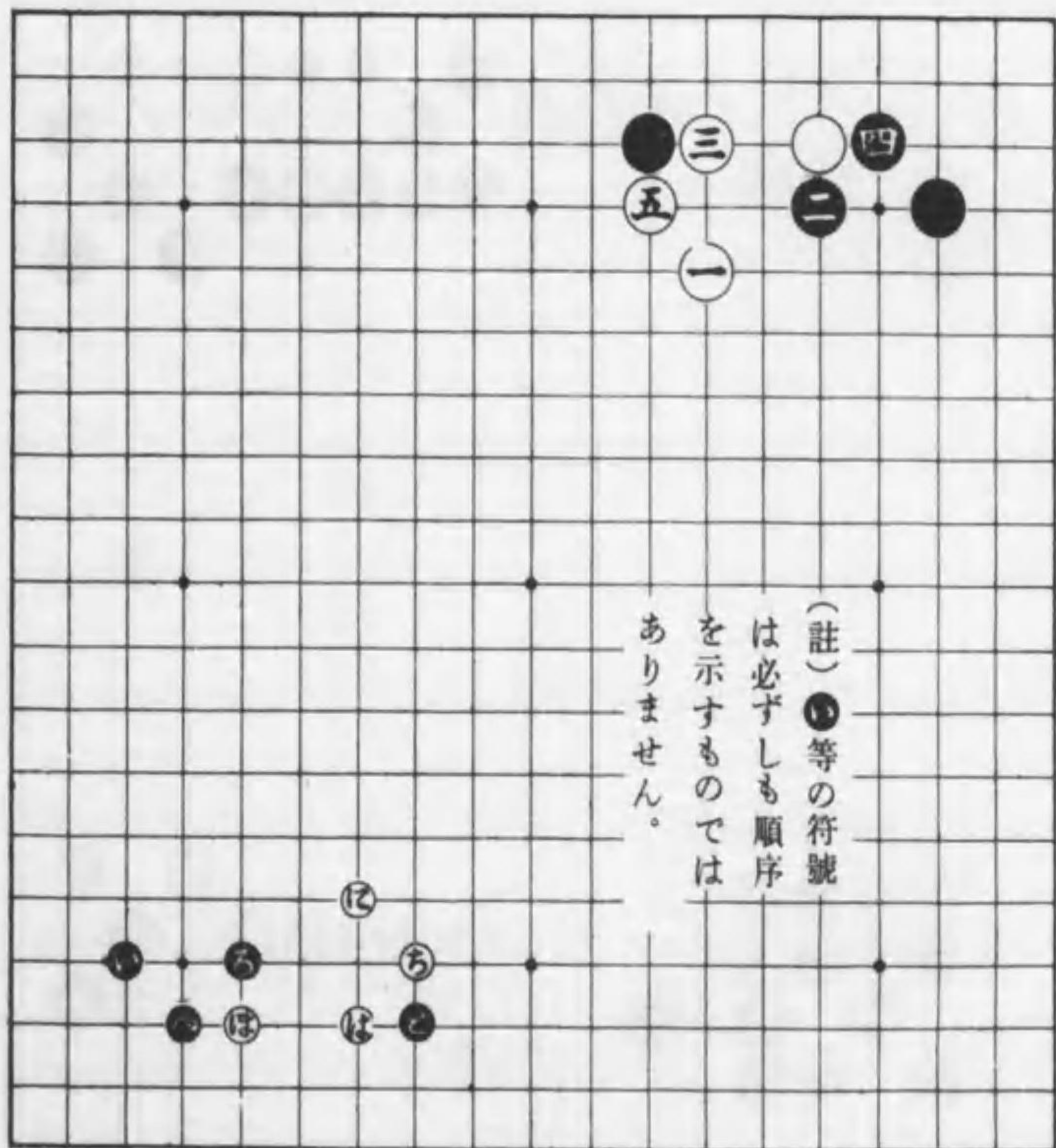
左下隅白三は七に綽込む征關係の如何に依らず十七迄振換る作戦の時です。二間夾に限つて行はれる型古くからあります。第八十三圖下隅に比して一が一路遠いだけにその點は白が働いてあますけれど、絶對の可否としては斷定の限りではありません。布石關係が加はりますから。なほ三間夾返しに就てはすべて後の手抜定石を参照されたい。





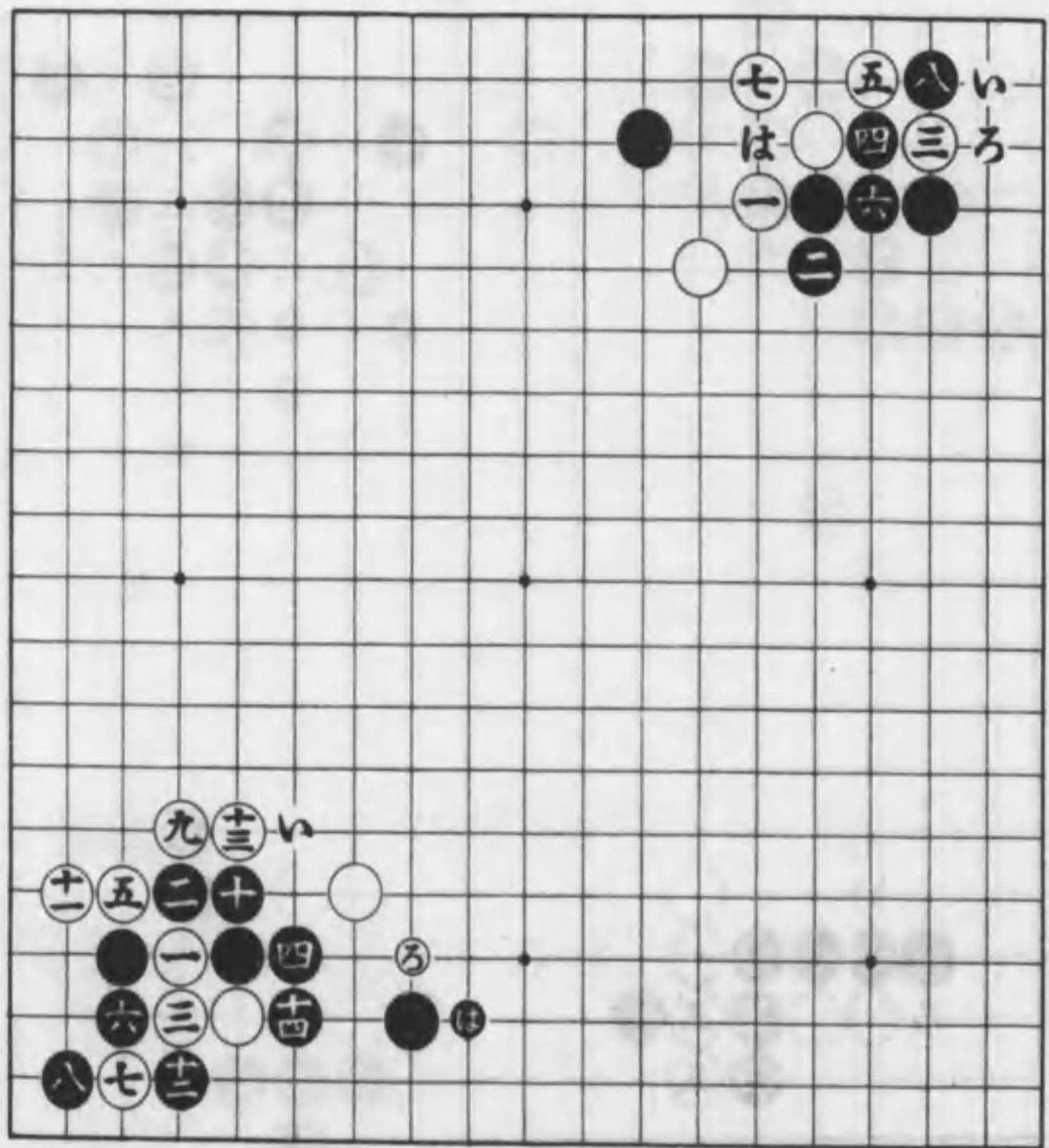
(第八十九圖) 白一と打つ新しい型に入ります。これに對する黒の應手は二の外に凡そ四通りあります。が順次批判を加へませう。白三の變化に就ても逐次示す。白五迄にて一段落とし、これは最も簡明です。その理を左下隅に解剖します。

下隅の如く黒が①と締つてある處に白②及び白③、黒④また黒⑤、白⑥の交換を加へたものと上隅は等しい。⑦以下の交換は互に不利を相殺して考へる時、黒に締りを許した結果に當るから、黒に有利の形と言はざるを得ない。



(註) ①等の符號は必ずしも順序を示すものではありません。

(第九十圖) 白一と締れば以下八迄となる位のものですが、黒は隅に實利を收めて二間夾の効果。をこの方に擧げた形、二間夾の石には勿論まだ活動の餘地ある故、簡明なる點に於てこれも黒が悪くない歸結です。但し白七をいとせば、黒ろ白八、黒はと切る。下隅は白一と締込む變化です。白五以下、勢ですが十四迄となつた時に白はいの處の薄弱を痛感するでせう。白からどう備へても拙いし、忘れれば黒いの締出しがある。⑧の交換の如きも感服出來ず、交換するも白は依然薄い姿。

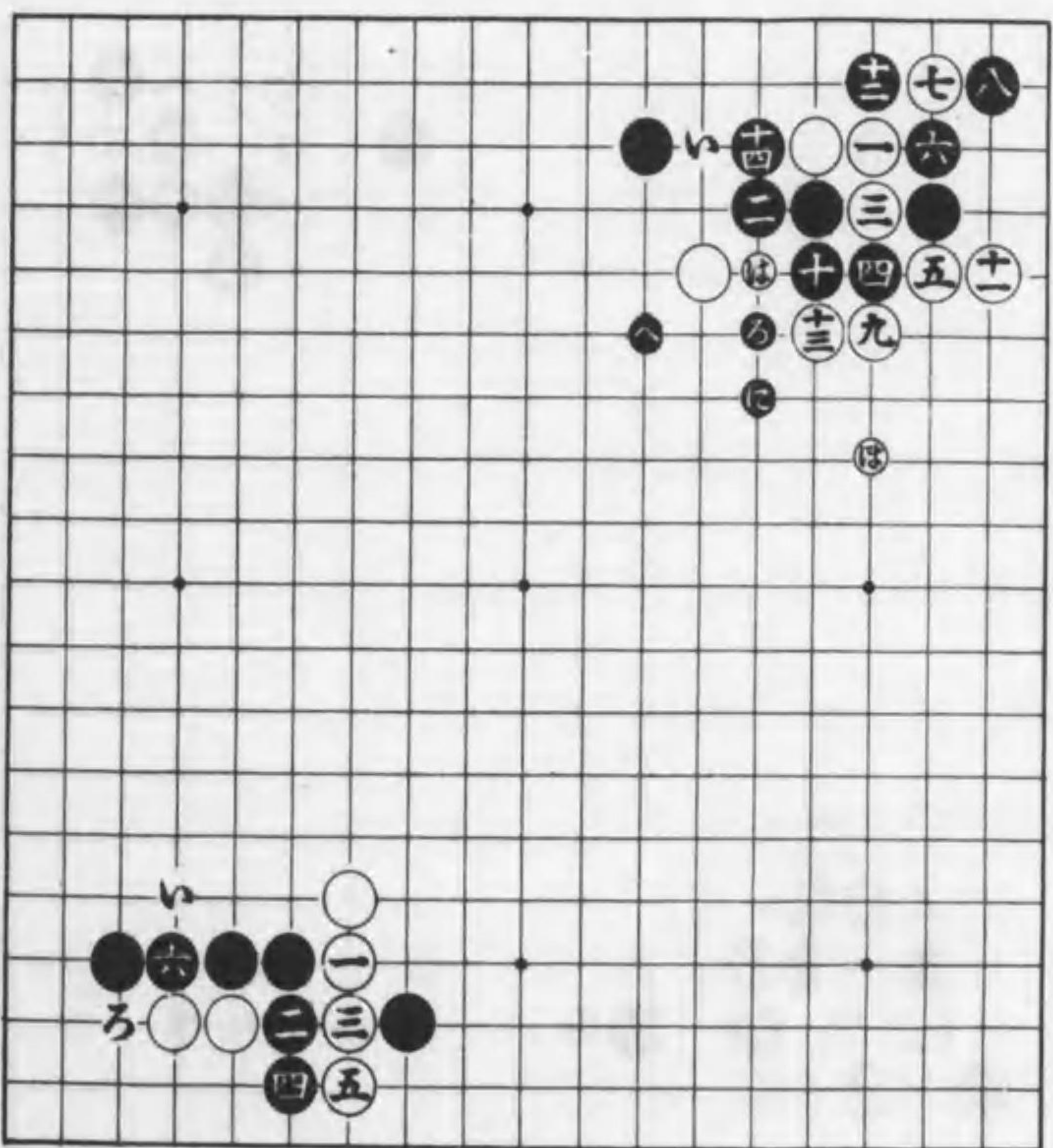


(第九十一圖) 白一と行出す變化黒二と行びて前圖下隅に歸著します。二を六に約へ、白いと頂けられては黒が不十分、前々圖に比するも自明でせう。

白三の變化は左下隅に。

なほ黒●に對して白○と若し切れば黒は●●と打つて申分無き事を附加へて置きます。

下隅は白一・三と突出しました。黒六迄實利の六は二間夾の一子を失效せしむるも意としません。白一に先だち白六黒いの交換をせば黒は白五の次にろと約込んでこれも大利です。なほ次圖に。



(第九十二圖) 白一黒二を先に

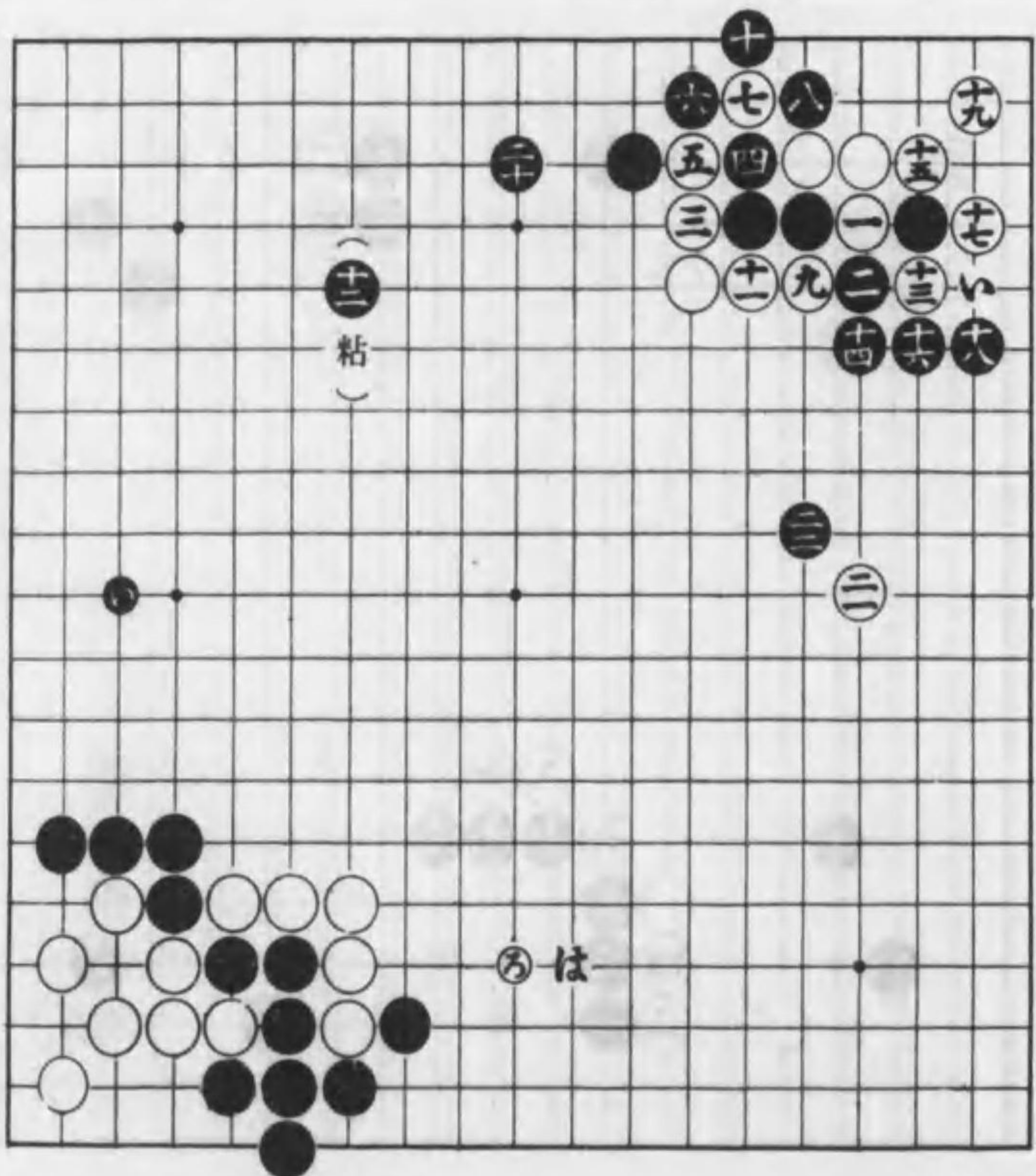
して三五と突出した時に黒は六と盤る事も出来ませぬ複雑に陥るは免れ難き勢です。

白十三にて十四より當てるのは隅の損失が大きすぎる。

黒十八をいに當てるは危険

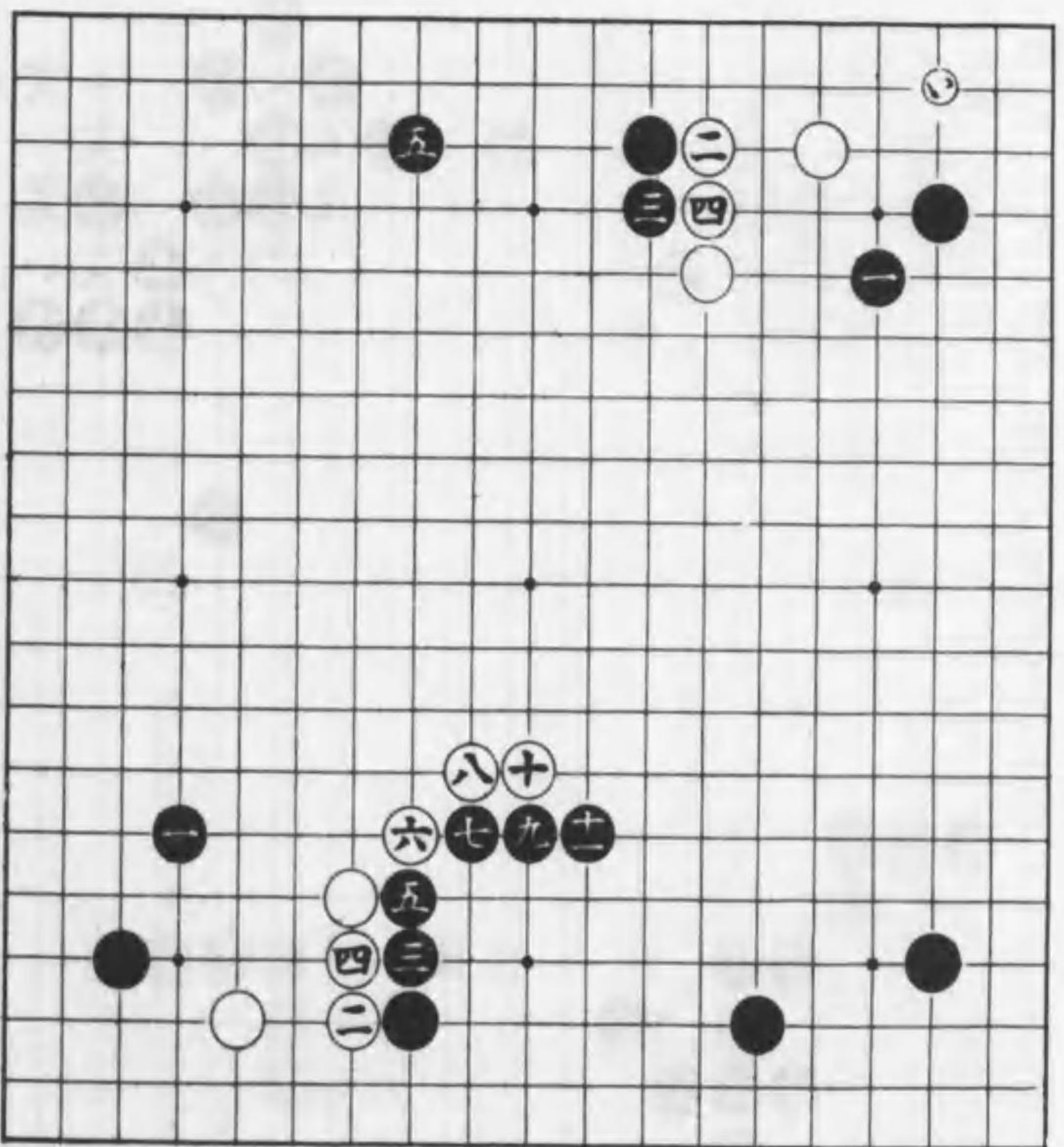
白二三以降示すべき限りではないが右下隅に白の締りでも有らば白は随分大きな形勢を張り得ます。黒六の考ふべき所以。

下隅は黒●とこの方に拓いたのです。然る際には白が○又ははと迫るは必然その取捨は右下隅との關係に依ります。



(第九十三圖) 黒一と尖むのは五の拓き迄となつても黒の重い姿で、一が白の堅い處に近く尖んでゐる點、感服しません。白は次に③と走つて宜しく、④は自他の根據に關します。

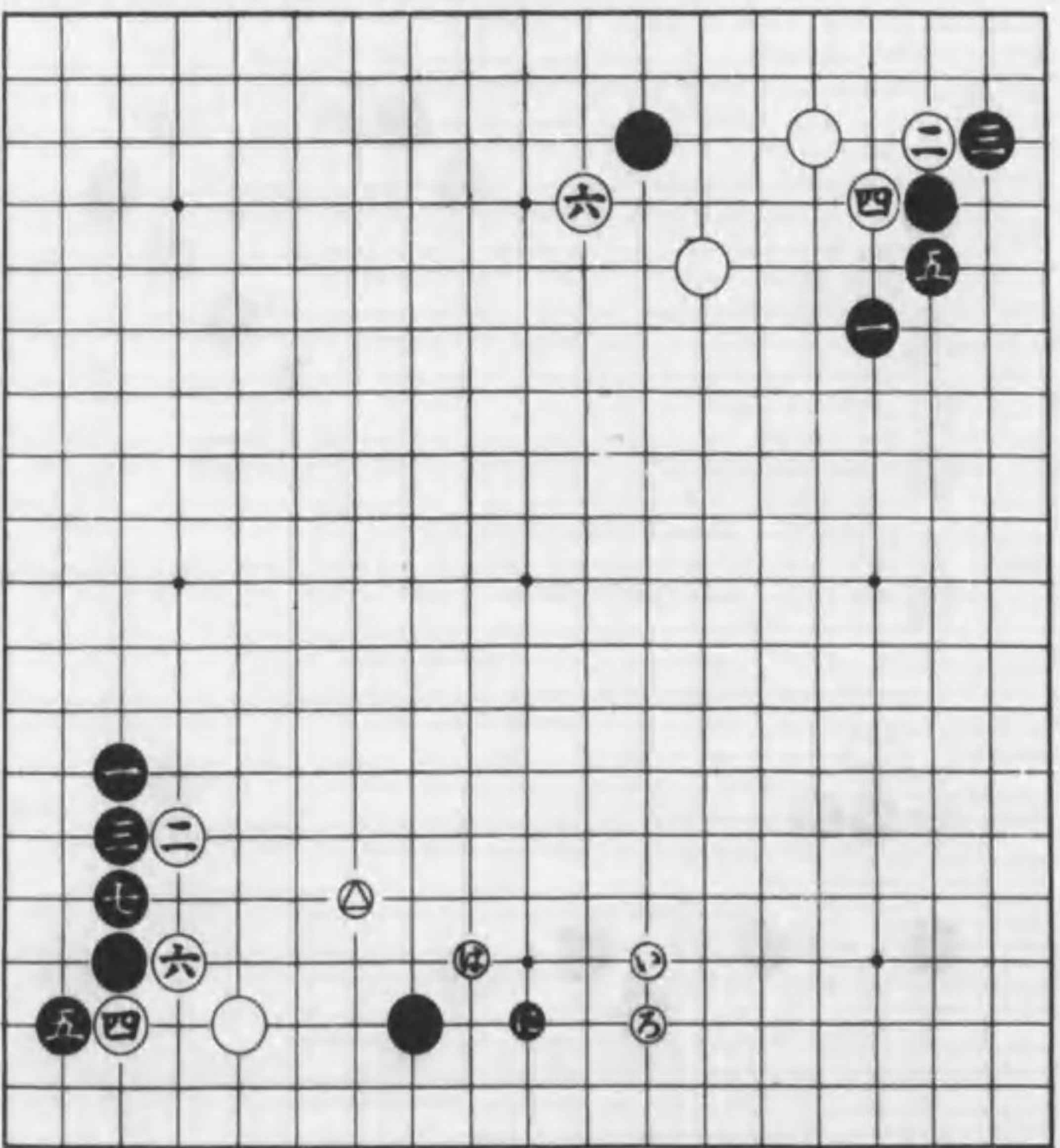
下隅黒一と斜走する方が白の堅きに接しない意味に於ては優るので、すそして若し右下隅方面に黒の締りでもあれば續いて五以下と透かさず打つて全部を地にする意匠が成立する。この事は右上隅に就ても言へますが、黒一の尖みと斜走を比較せば、後者の方が有力なる理を知られたい。



(第九十四圖) 白二・四を先にして六と掛ける二間夾第五十四圖に類する型ですが、それよりも白としては幾分働く意味になります。従つて同圖を参照される事を望む。

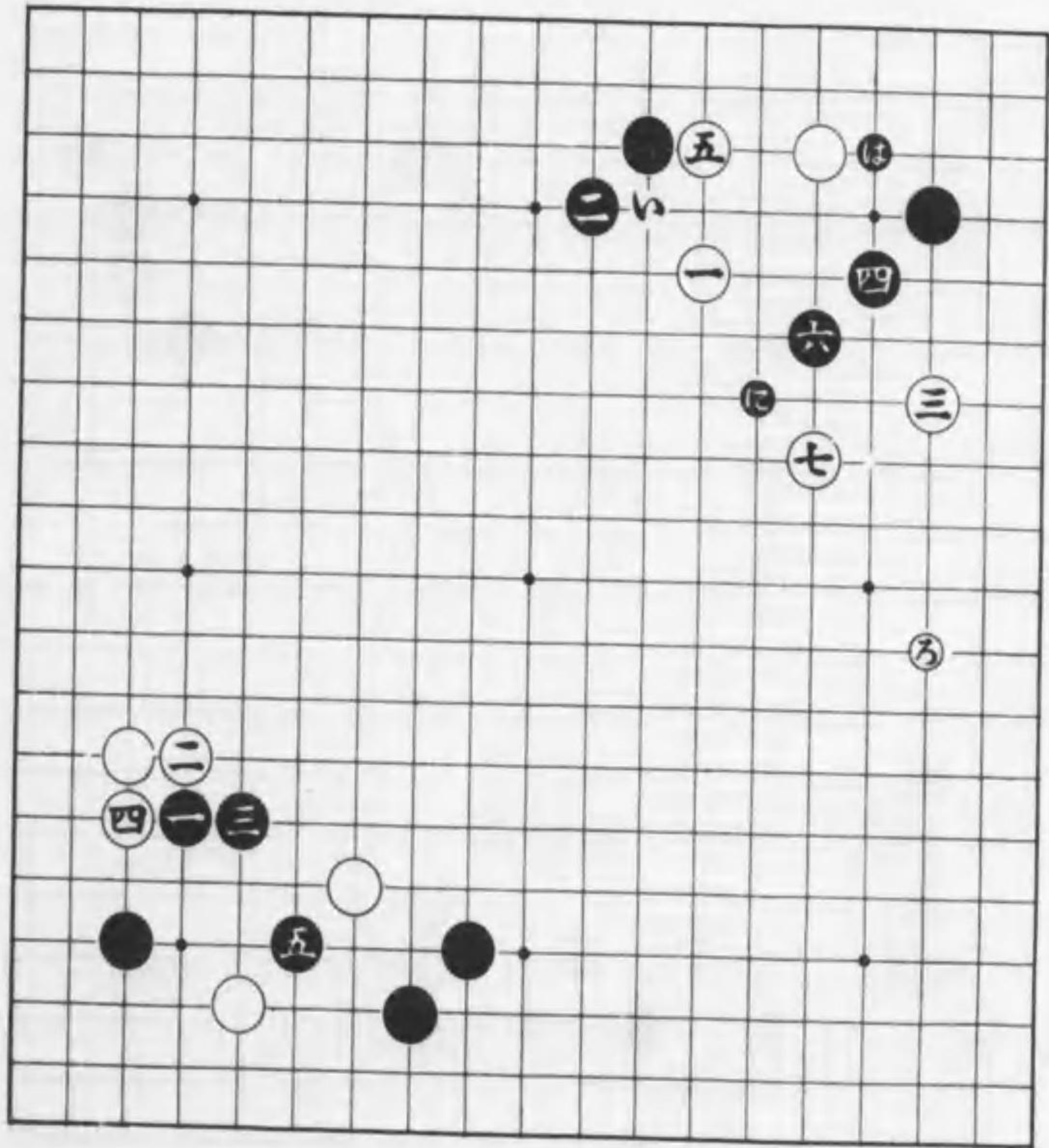
左下隅黒一はこの方面に受けるにせよ、尖みよりも斜走よりも適切です。④の位置のをかしい事にも注目する。

白は次に③若しくは⑤と迫るので、右下隅の條件次第です。但しその前に白④黒⑤の交換を先に示す意味もあるべく、局勢に依り明示する譯に行きません。



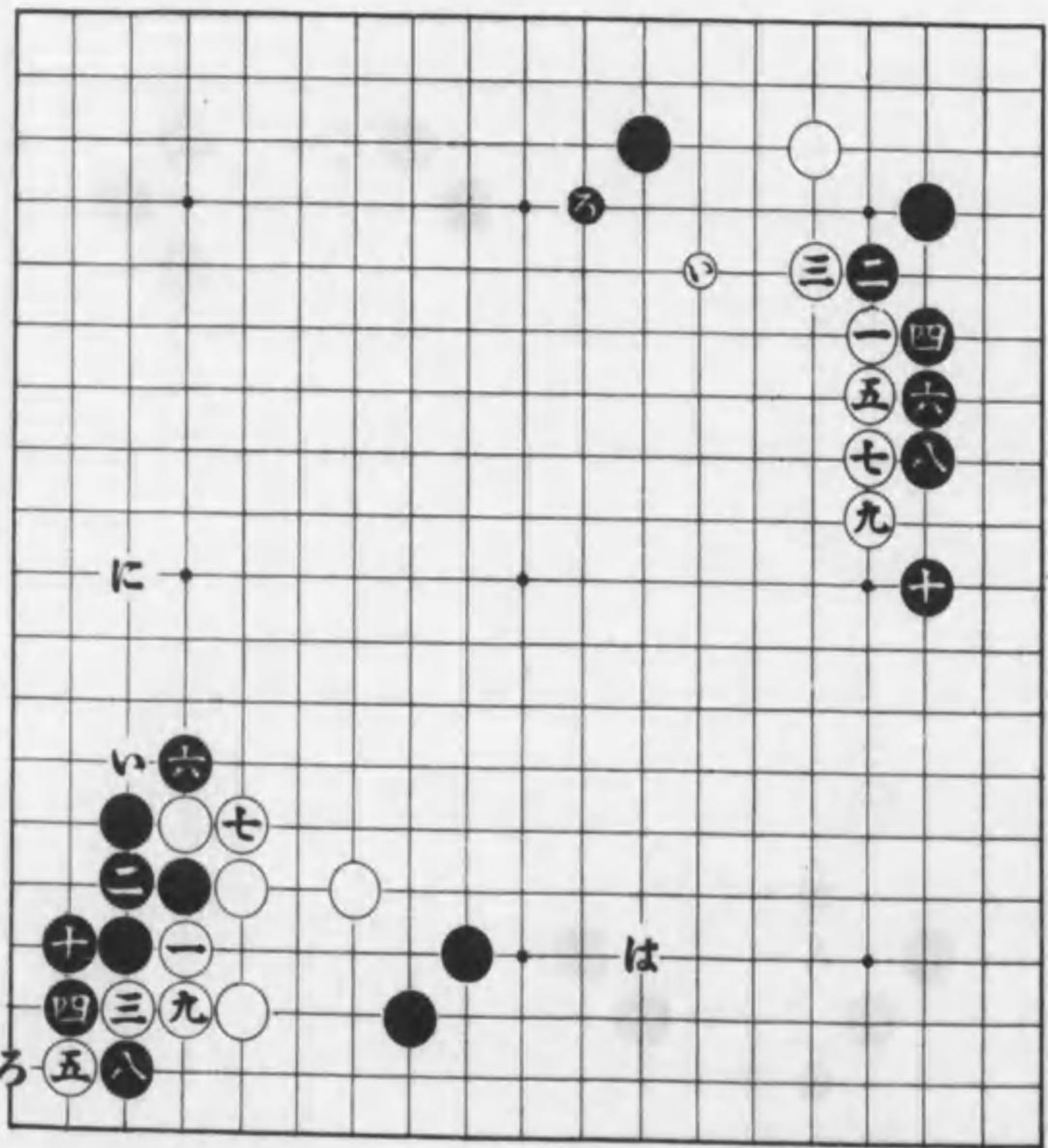
(第九十五圖) 黒二と尖こんで受れば白三と此方面から迫られる事を覺悟せねばなりません。黒四白五と好便に形を整へられて六と尖出した所では二がいの點に行びてありたい姿です。それを二と尖こんであるだけに白の打てる形稍白の註文に乗つた傾きがある但し白七は②方面に拓ひらくべき場合もあります。黒は次に①②何れも不十分です。

左下隅黒二三五の方が優つてゐる然し是とても不完全であり白六以下どう打たれるか分らぬ不安を免れません。



(第九十六圖) 白一の大斜走掛オオセウケ、黒二以下は簡明を主としました。初めに①②の交換が無くとも十迄となる型は有るのに、そこに此交換の加はつてゐる事は白重複の嫌ひなきに非ずです。若し左上隅方面に黒の勢力でもあれば白不利を否定できません。

左下隅一三五が白は宜しい。黒十はいに缺點ある故當然です。白は次いで直にろには下らず、まづはに何れかより迫つて黒の動靜を窺ふには形勢に依て選びます。前掲諸圖中白としては最も働いたものと言ひ得る。

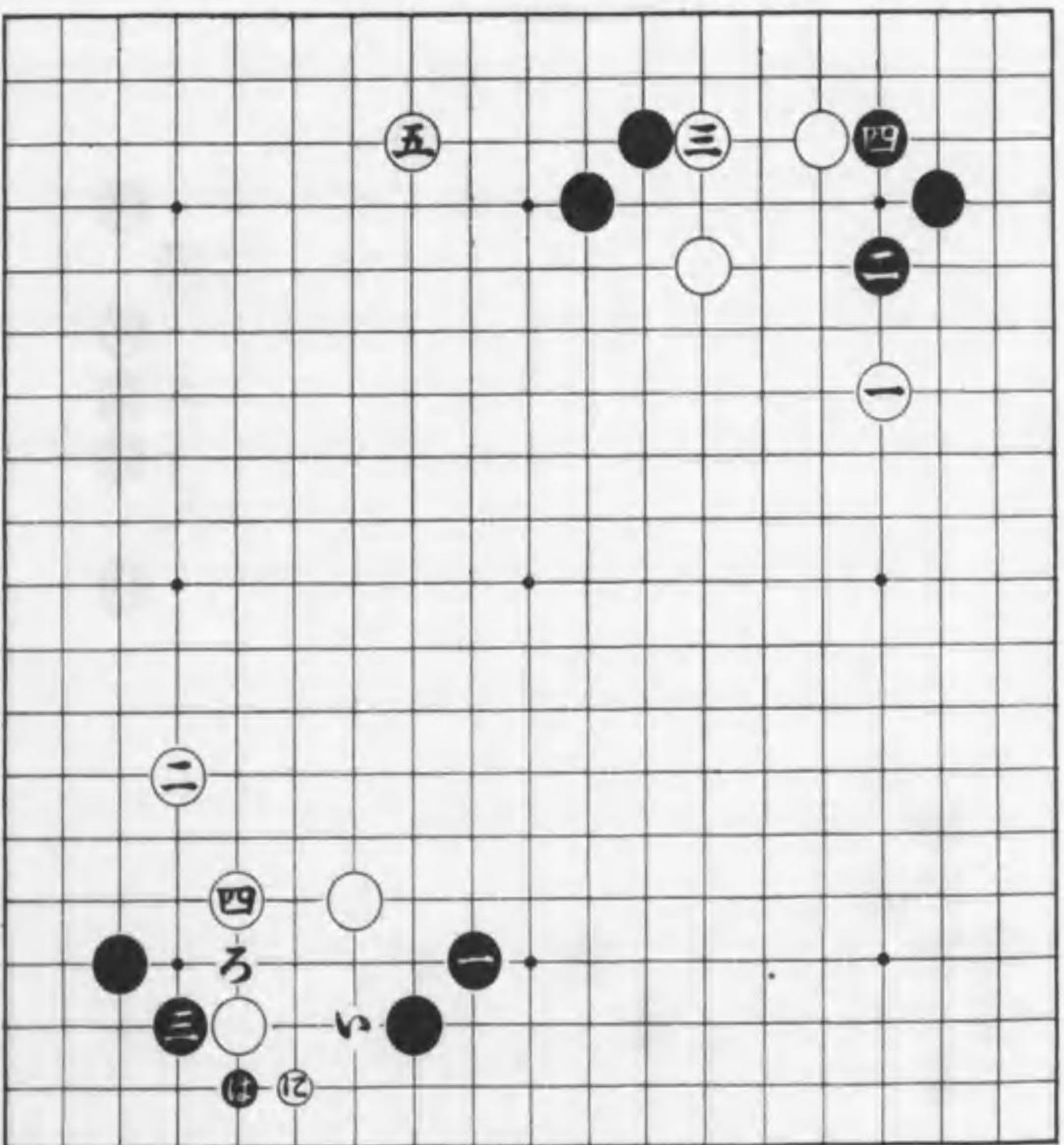


(第九十七圖) 白一と打つ様な趣向も考へられます周囲の條件にも依る事ですが五迄となつて白の洒落た形である。

左下隅は黒二の尖頂から先にしました。

白四でいの方に飛頂ければ黒はろとふくれて置くのですが何れにせよ白の軽い姿。

白四に次いで黒五と緯ねて来れば白七と約へるのは勿論です。そしてこゝでも初めの黒一が働かぬ著點に當つてゐる變化はまだ有りますが要するに黒一は消極的にして意進まざるもの。

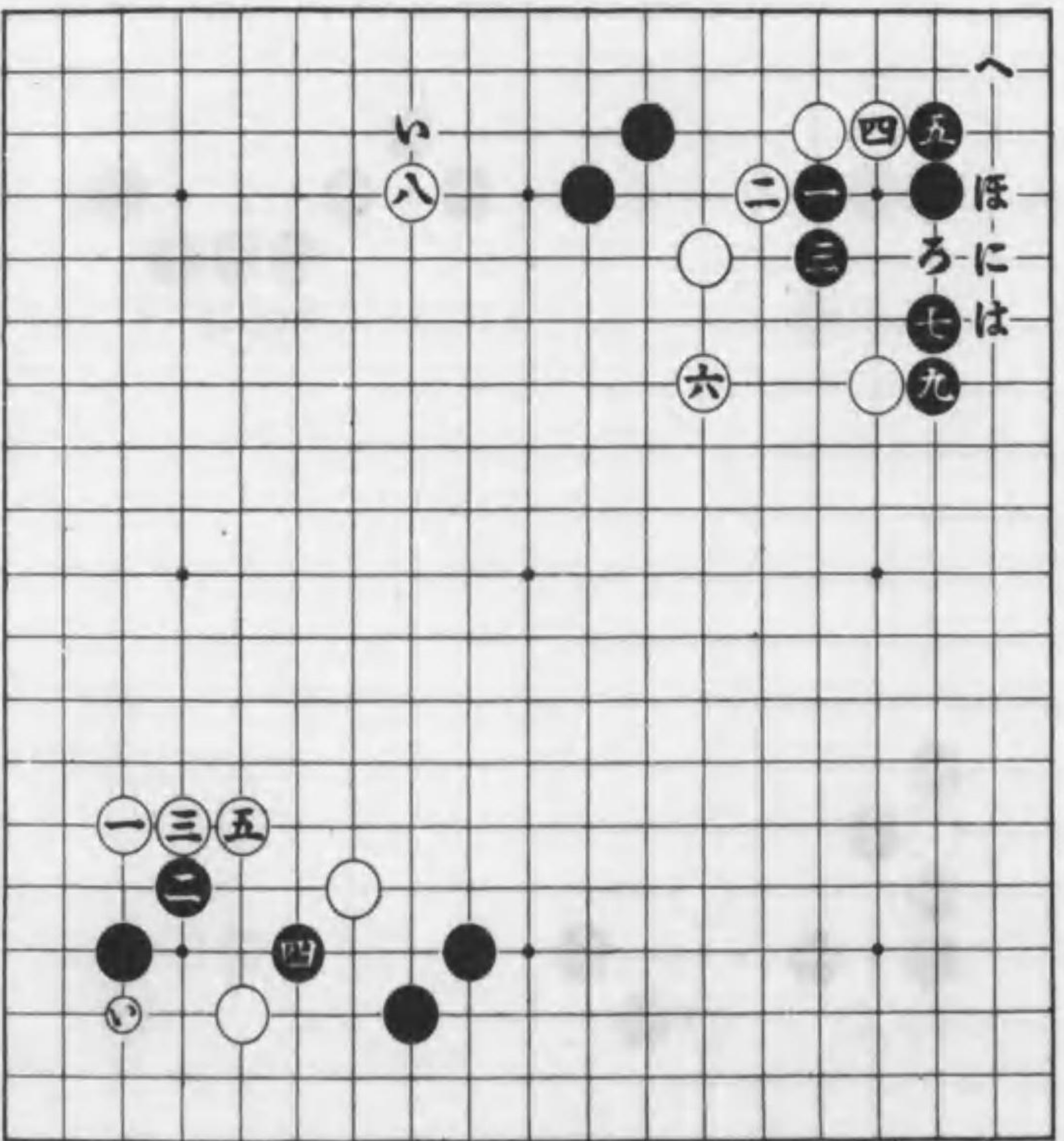


(第九十八圖) 黒一と茲で頂れば白六迄となる黒七の次に左上隅に白の配置があつてそれから

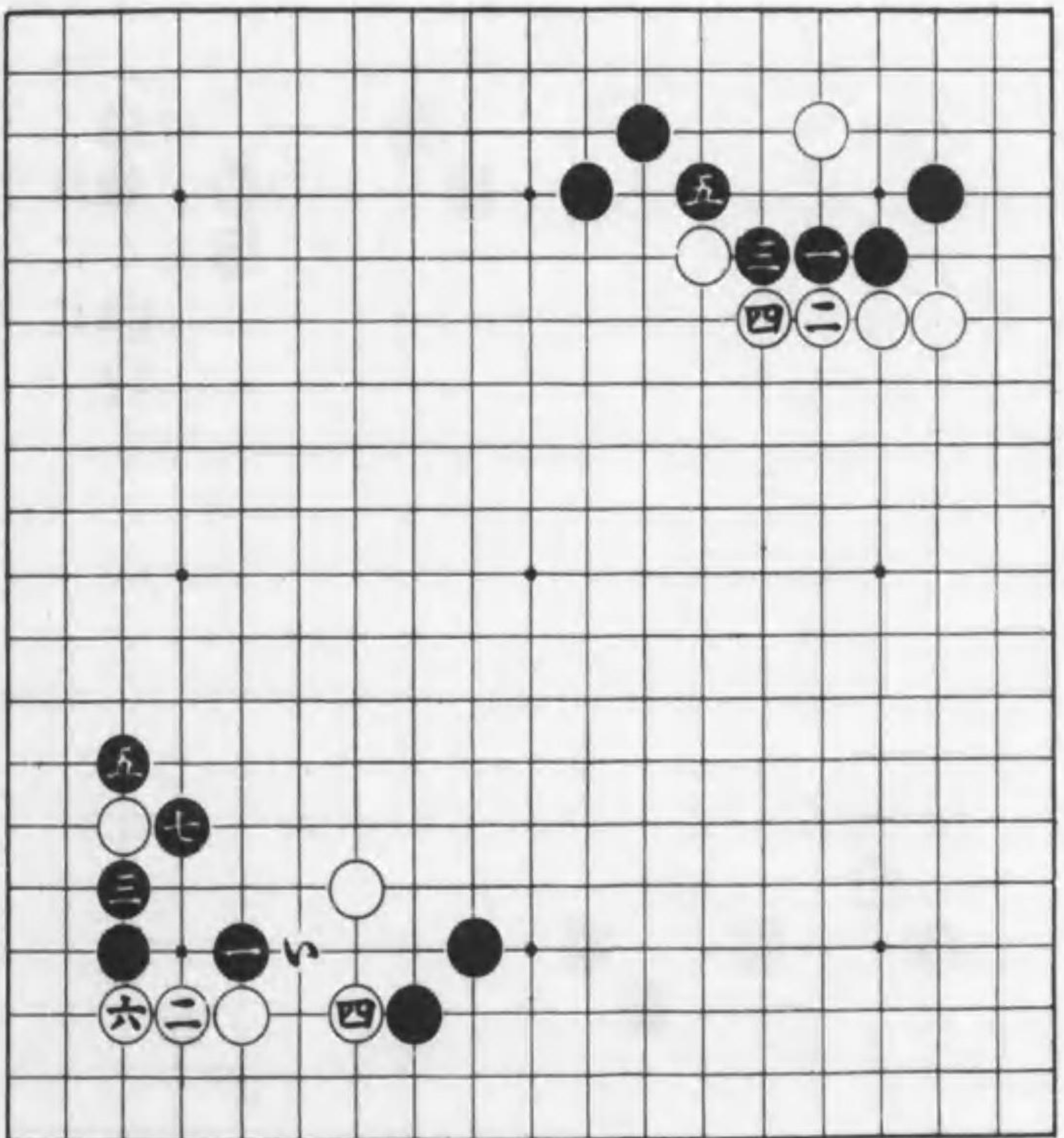
白いと迫られる様な場合には七でいの方に拓かねばならぬ。理その代り白七黒ろと應じ後には白はの下り又白に黒ほ白へと置かれる工合等を残します。

黒九以降示すべき限りではないが白八にて九に約込んで良い事もありませう。

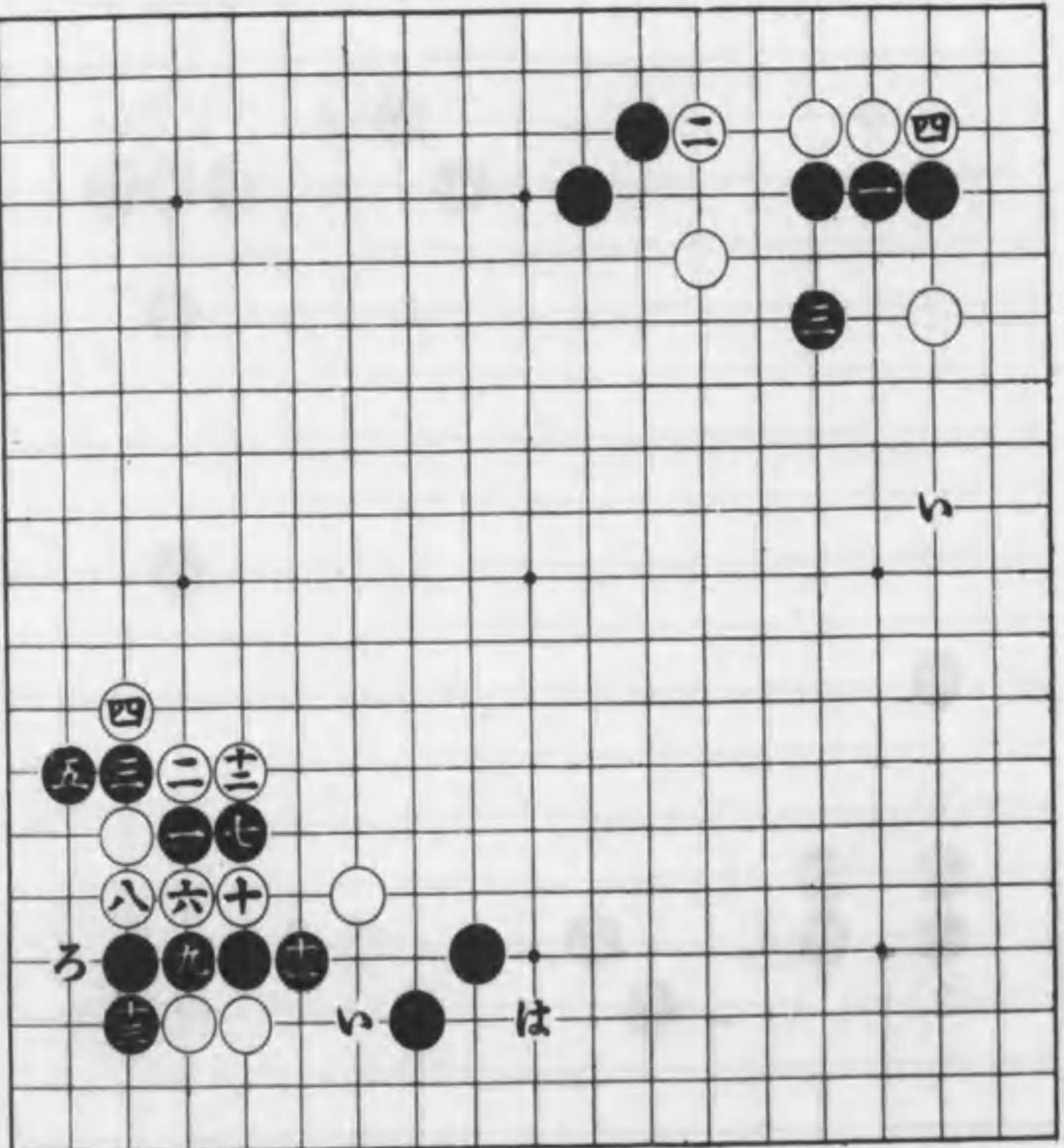
左下隅は白一より變化この時黒二四は白五と行切つてみられて白九その他の味あり甚だ感服しない形です。



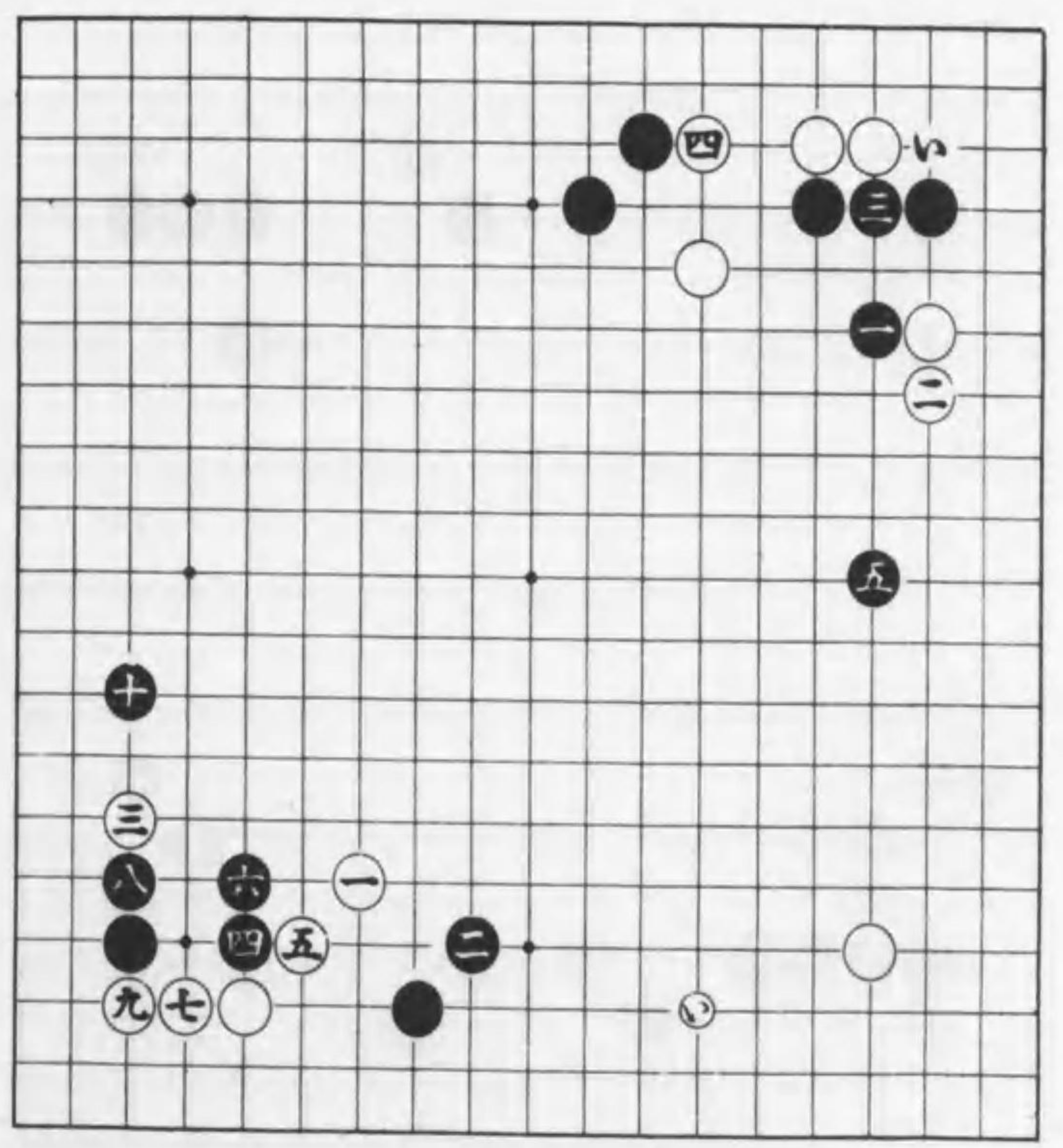
(第九十九圖) 黒一三五と打てば前圖下隅よりは確かですが隅はなほ厭味です四迄の勢力に依つて白は打てる形。  
 前々圖でも言つたやうに黒の初めの尖みが働いてみません。  
 左下隅は黒一と頂けました。  
 白二はいに縛ねる事も出来ませんが斯く行出せば黒三は當然、  
 白四が矢張り働いてみます。  
 白六黒七は直にといふのではありませんが早晩斯くなるものとして宜しく所謂見合ひの處です七迄白も相當打てる姿と観られるなほ次に。



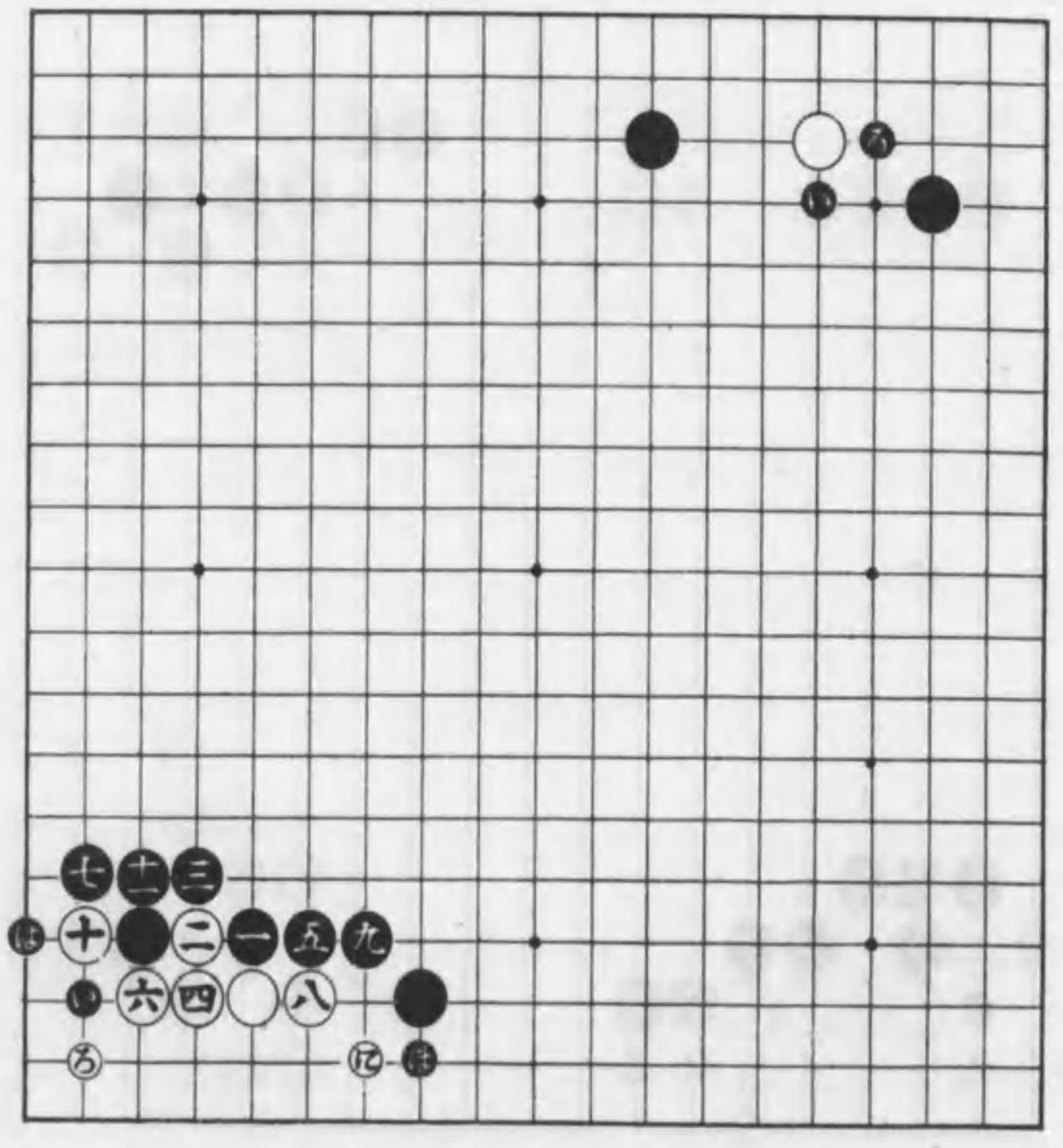
(第百圖) 黒一と粘いで白四迄となつては前圖下隅に比しても黒不利疑ひありません。  
 黒三を四に約へれば白は三に飛んで封鎖すべく又白四は右下隅方面の條件に依りいと折いて良い場合もある理です。  
 左下隅は黒一と頂る變化。  
 白二を十三に約へ黒八白黒三となれば前圖下隅に戻ります。一に應じて打つとせば二と縛ね、十三迄は黒白共に打てる形。  
 黒十三にて食つてろに下るのは他日白は等を利かされる味が残つて不完全です。



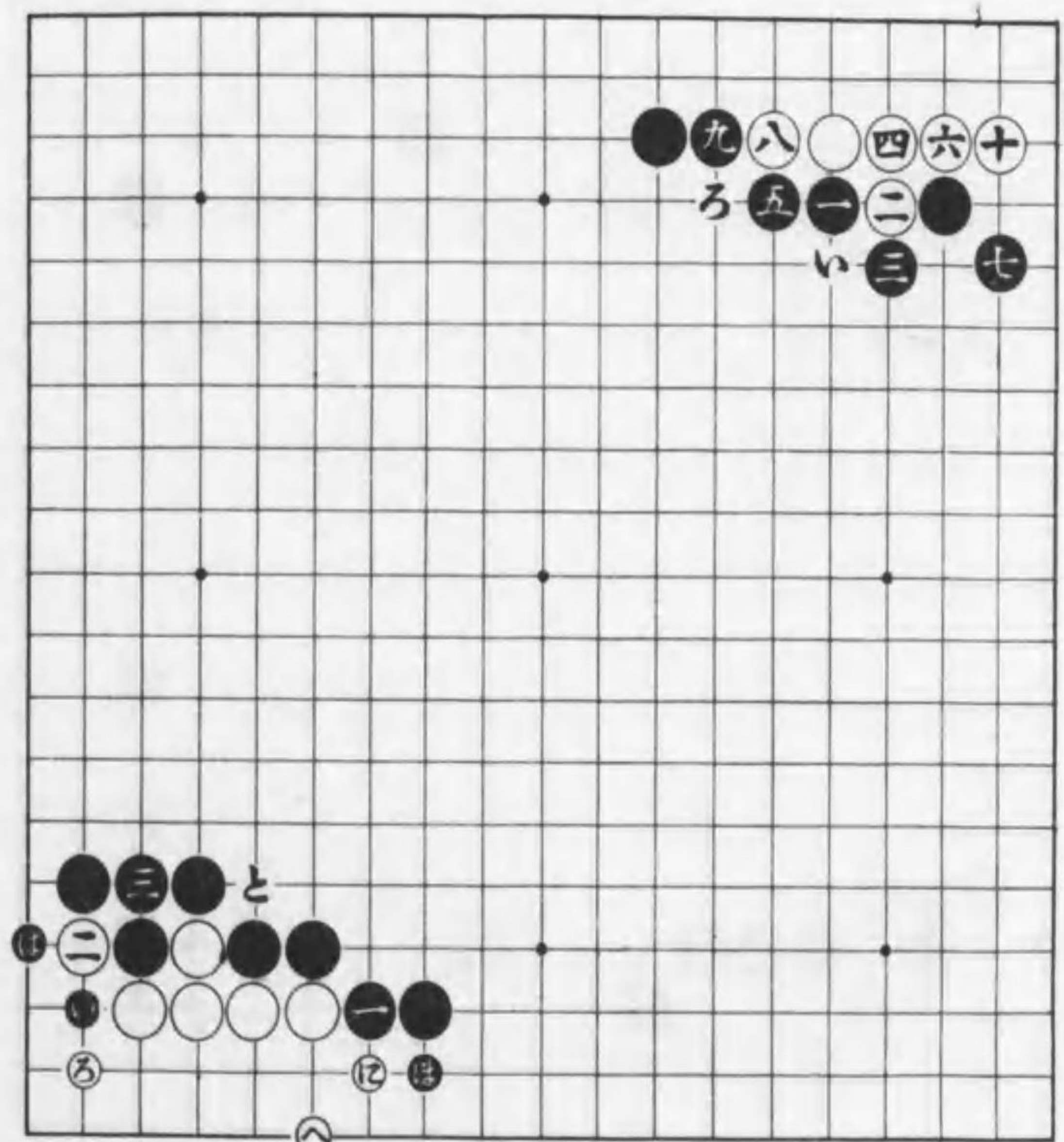
(第百一圖) 白二と引くのは形の重い點がまづい、  
 三々いの要點に何れから先鞭する事となるかは言へませんが右下隅方面の條件にも依るもの、  
 黒五と夾撃されては白有利と觀られない。  
 左下隅白五と綽ねればまづ十迄となる等普通です。この結果に於て白一黒二共に弛んだ形であることに氣附きます。  
 右下隅に白の配置があつて黒十の次に①と詰め得る場合には白が悪くないけれど然らずしては白不利とします。



(第百二圖) 二間夾に於て白が手拔し黒から先鞭する手拔定石に入ります。出發點が二つあつて、  
 若しくは②がそれです。従來所掲諸圖は畢竟この②及③を牽制し又緩和するを以てその主たる目的としました。  
 左下隅白二と綽込み得るか否かの征關係に就ては一問夾手拔定石に於ると全く等しく、二間夾にても既に數次申しました。  
 黒十一迄は基本形その外勢の大は明瞭です。後に黒④白⑤黒⑥に對しては白⑦に依つて活路を保ち、黒⑧は直接利きません。



(第百三圖) 黒九と突當れば白は後手に甘んじて十と下りいの切味を窺ふ隅の地にも前圖下隅との間に差があります。  
 なほ黒九にて十に倅ね白九黒ろ以下の型に就ては三間夾返定石中に示した所と異ならぬ故こ、には省略します第百八十七圖参照下隅白二の不當は黒●以下を何時でも利かされる關係又との切味を狙ふ意味の有力ならざる點に於て證明されます黒●に對しても手の抜けぬ事すべて前圖下隅と比較せば思ひ半ばに過ぎるものがあります。

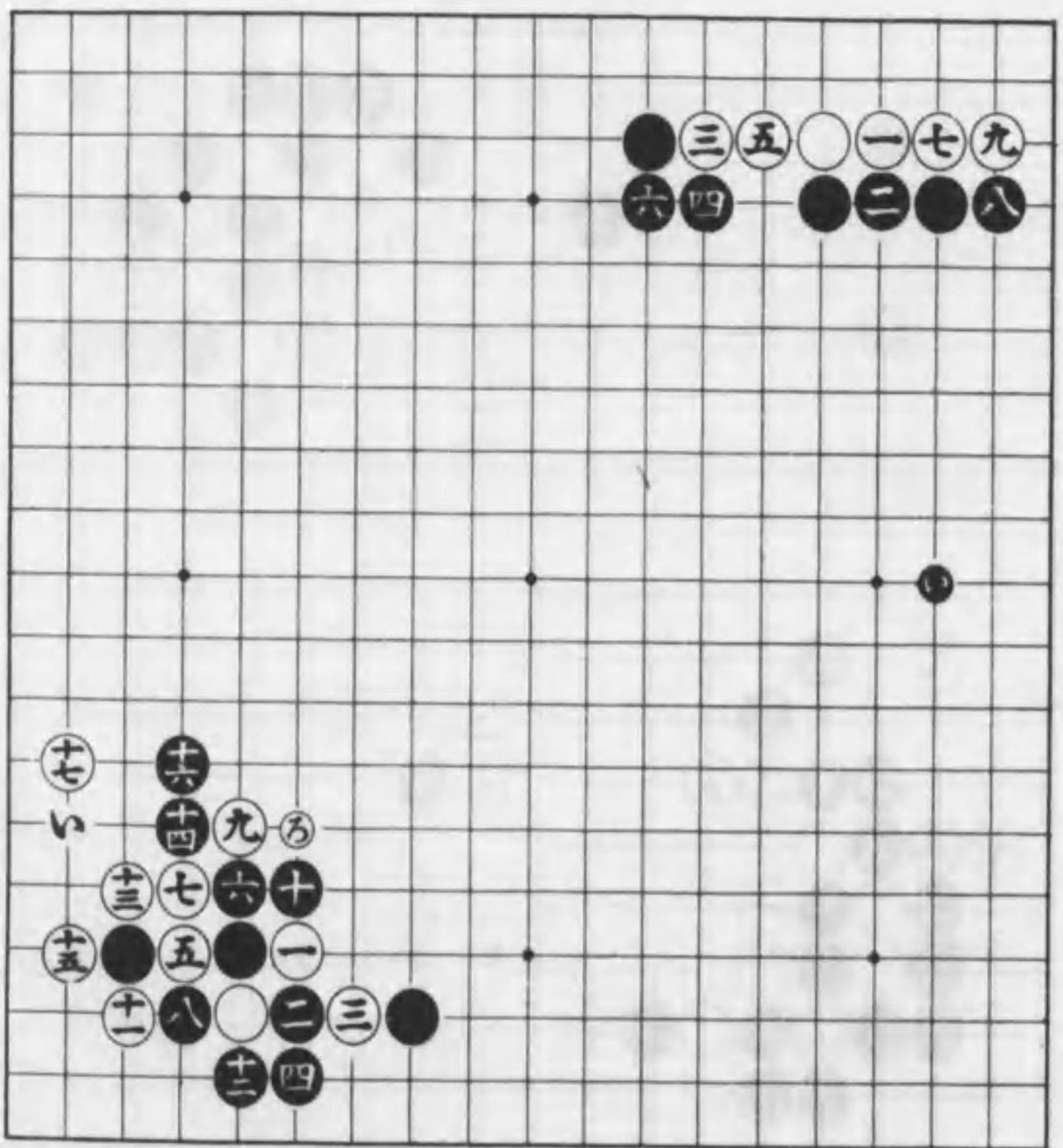


(第百四圖) 白一は征關係よりして二に倅込み得ぬ場合には止むを得ません。

白九迄通型而して黒は●の方面に拓いて一段落ですが黒の優勢に就ては單に白が手を抜いたのみではなく、一で倅込み得なかつた所をも考へねばなりません。

左下隅白一は前掲諸圖の型を嫌ふ際に征關係の如何に拘らず用ゐる事あり第百八十八圖下隅をも参照されたい。

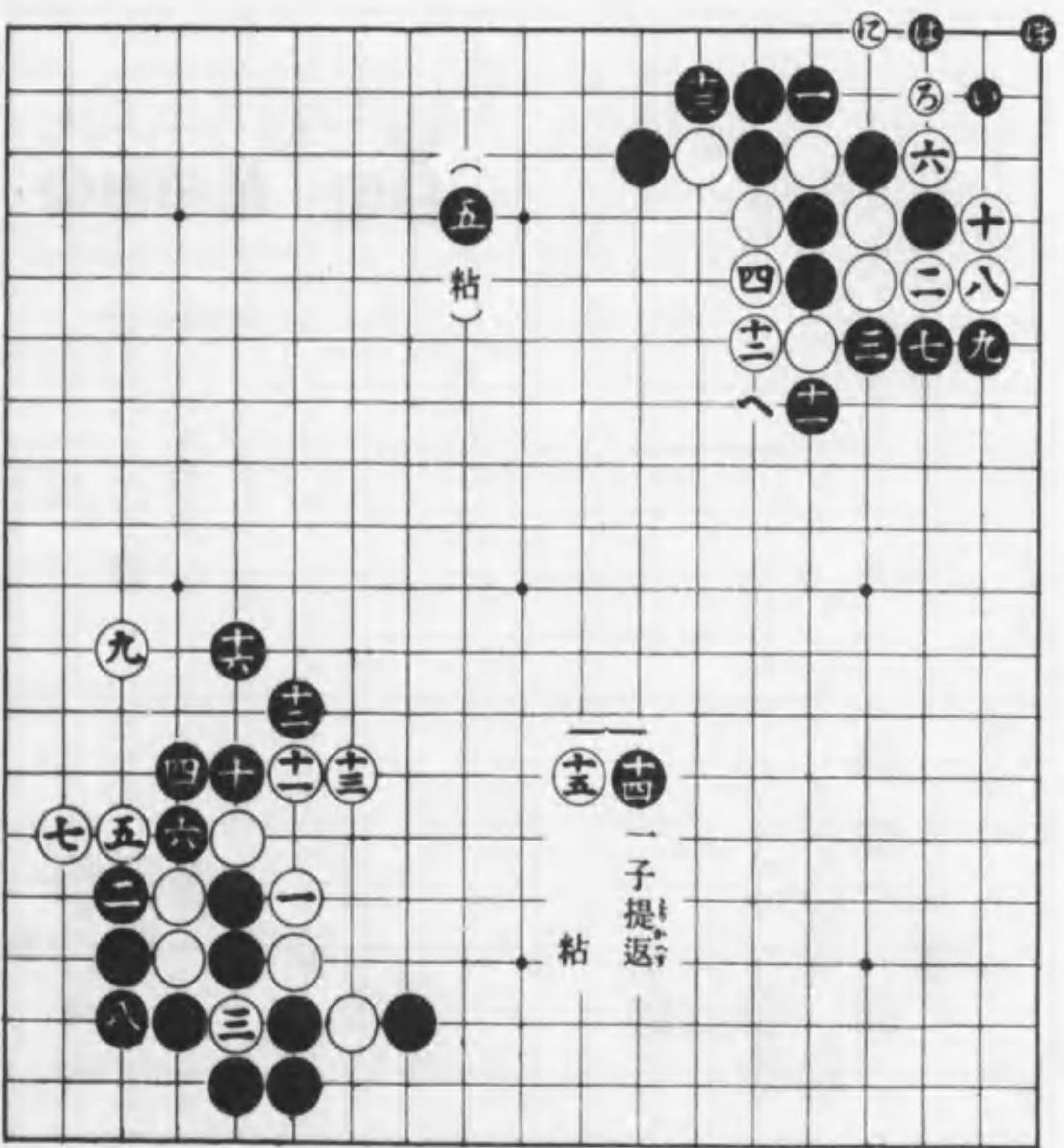
黒十四肝要又白十七を怠り黒いを利かされるは嚴しい十七の後に白は●と押す機を窺ひます。



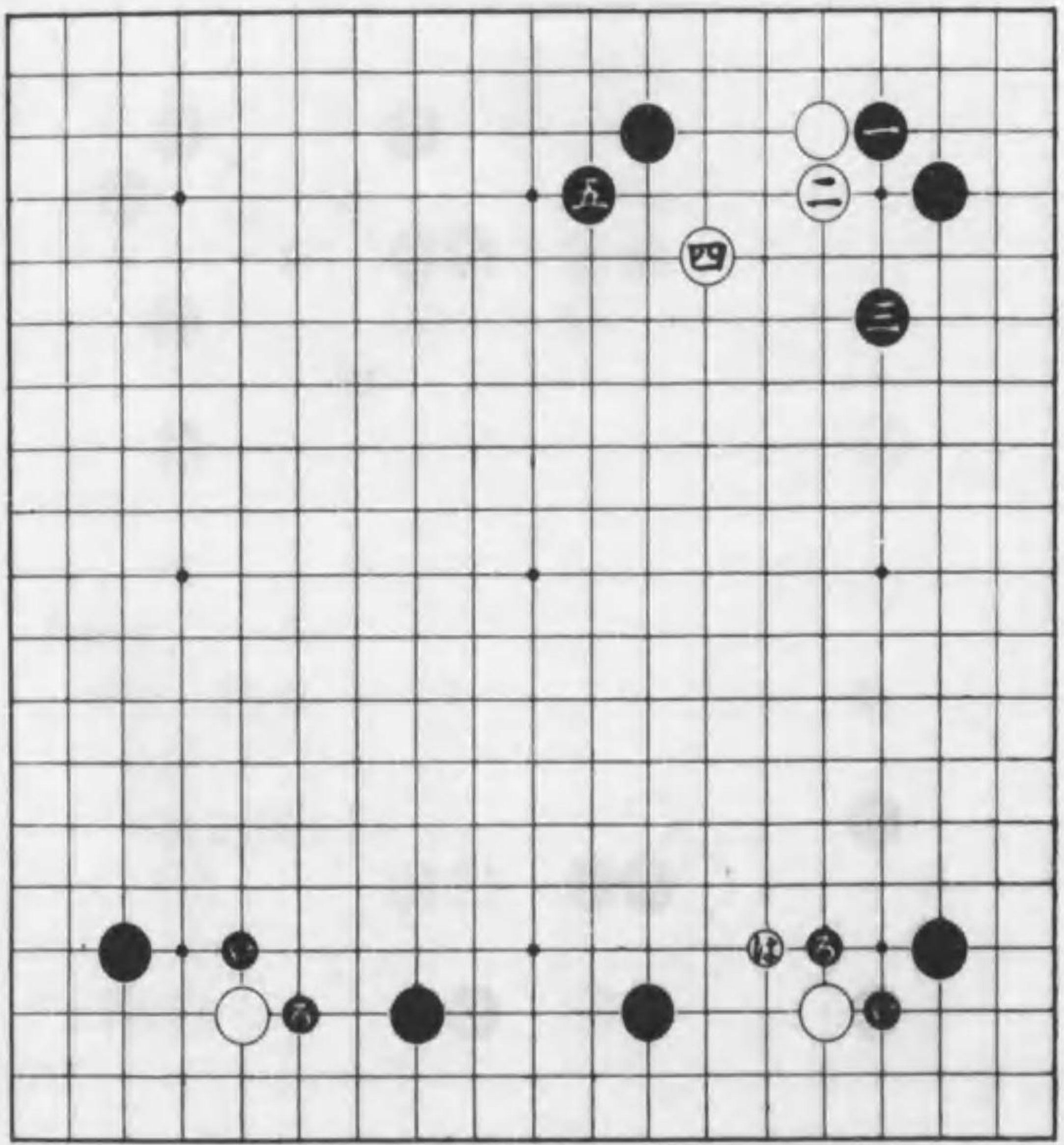


(第百五圖) 黒一より變化斯く打抜く事が絶無とは言へません然る時には白二以下十三迄となるを普通としこの後は四圍の條件が解決するのです隅には黒以下劫の手段の残る點に注意黒十三にてへに押し白十三と下られる變化は複雑を極め定石としては示されません。

下隅は白一の當を先にする變化黒二四は次に白三を提返して白五の綽出を防ぐ意ゆゑ白五はその作戦を挫きました然し十六迄となつては黒有利疑ひ無く一般に白一は上隅二に及びません。

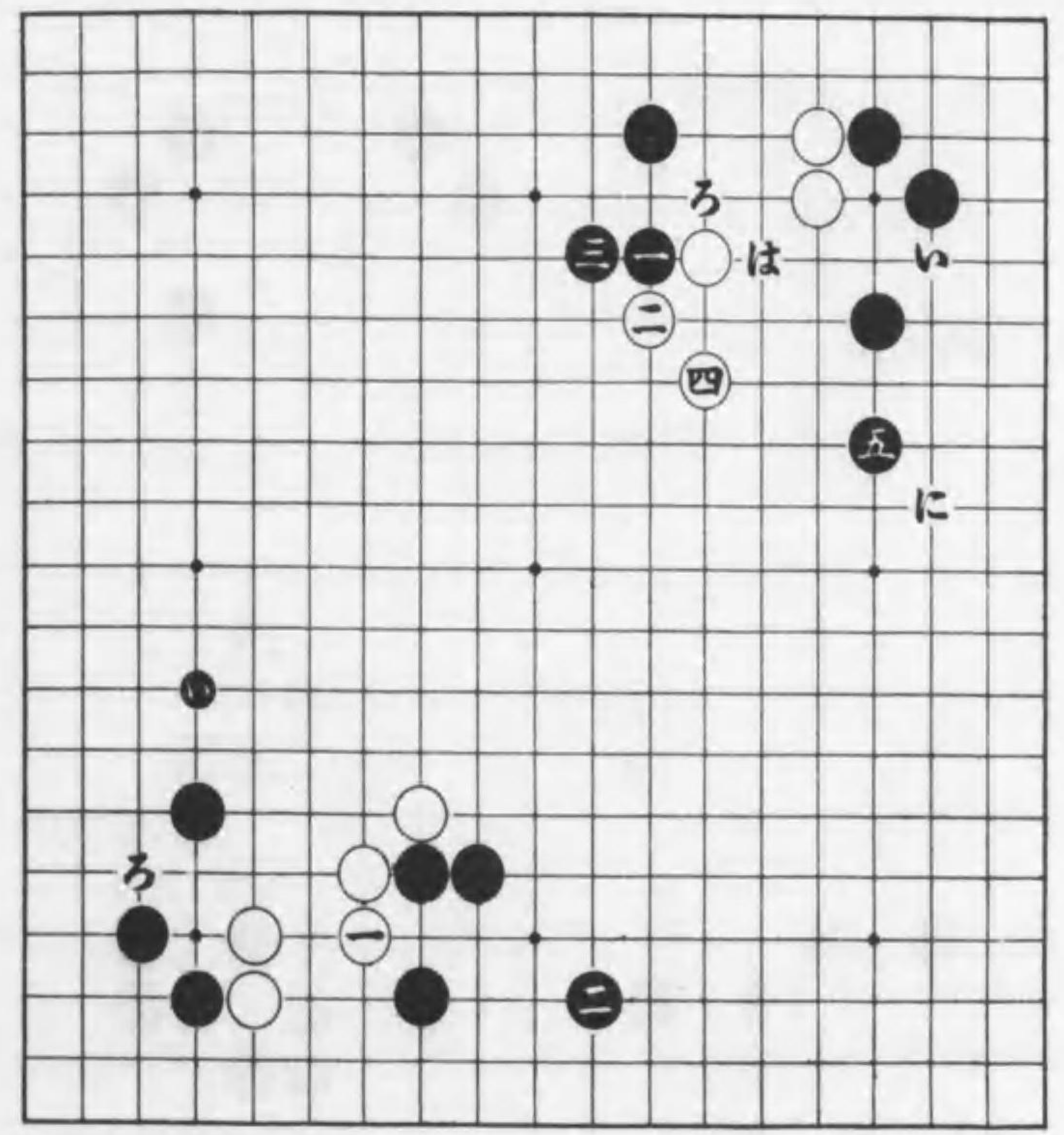


(第百六圖) 黒一の尖頂は白を二と立たせて重い姿に導き續いて三と煽り五と尖んで白を攻めつゝ左右に形勢を張る意匠。黒三以下の變化に就ては順次示しますが茲に注意すべきは形勢次第で白二は再び手抜することもあり得る點で次に黒が二に約へる事になつたとしても左下隅の如く黒を先にして白手抜而して黒と取切るのはその差が小さくない即ち右下隅は機を見て白と綽出され種々の味を含まれる工合有り主として布石關係に依る事ですが念の爲に



(第七七圖) 黒一の飛頂に對しては白二四と應じ黒五と飛んで白いの頂越しに備へます但し五にて先づろにふくれ白は黒にと拓く事も可能で左畢竟右邊の條件如何に依る事である。

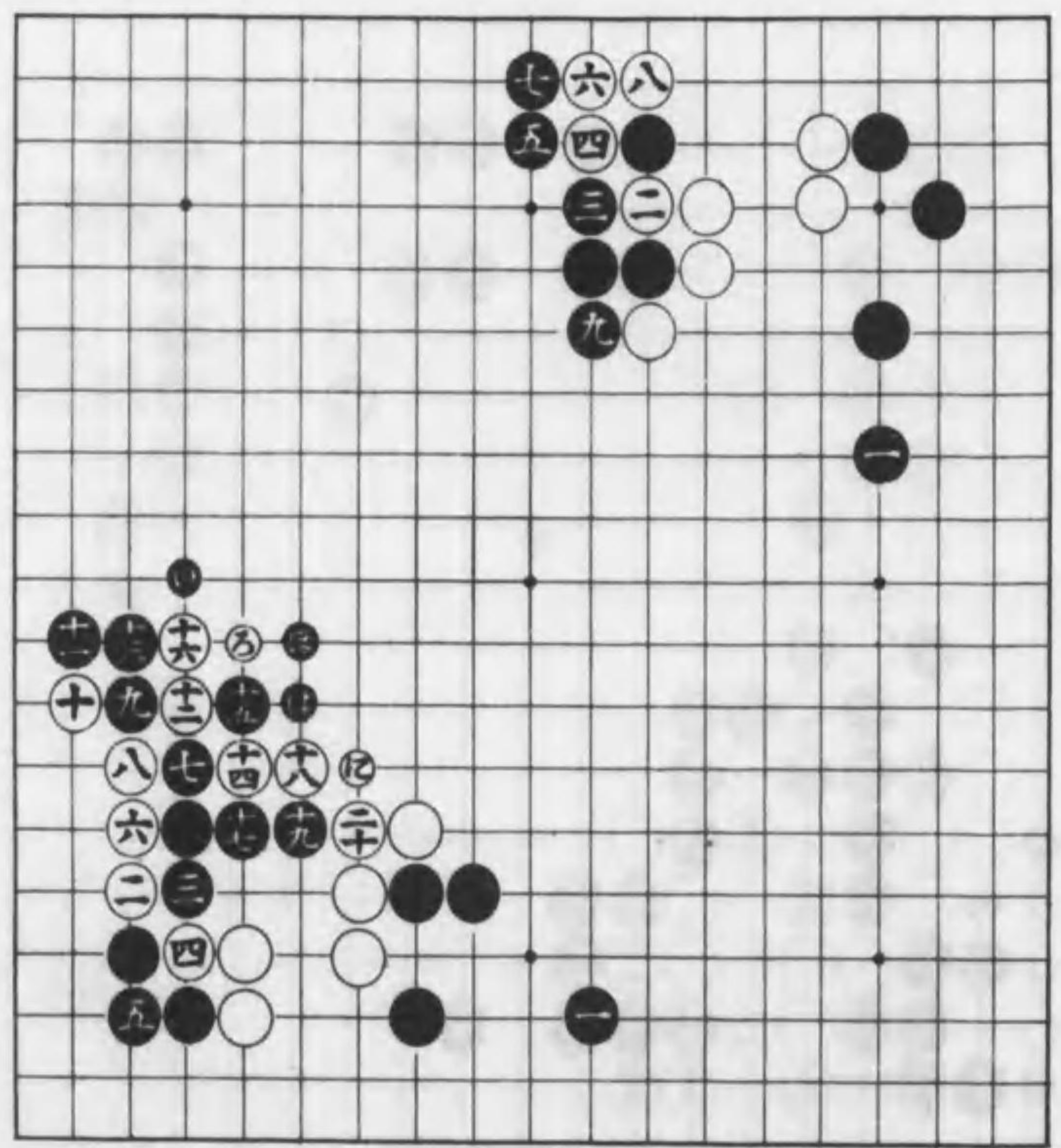
左下隅白一と引けば黒は二と拓くか●と飛ぶかですが拓いた時には次いで来るべき白ろの頂越しに應ずるだけの對策が無ければなりませんろの頂越し以下はその變化の主要なるものを次に掲出しますすべて参考の意味に於てするのですからその心を以て觀られたい。



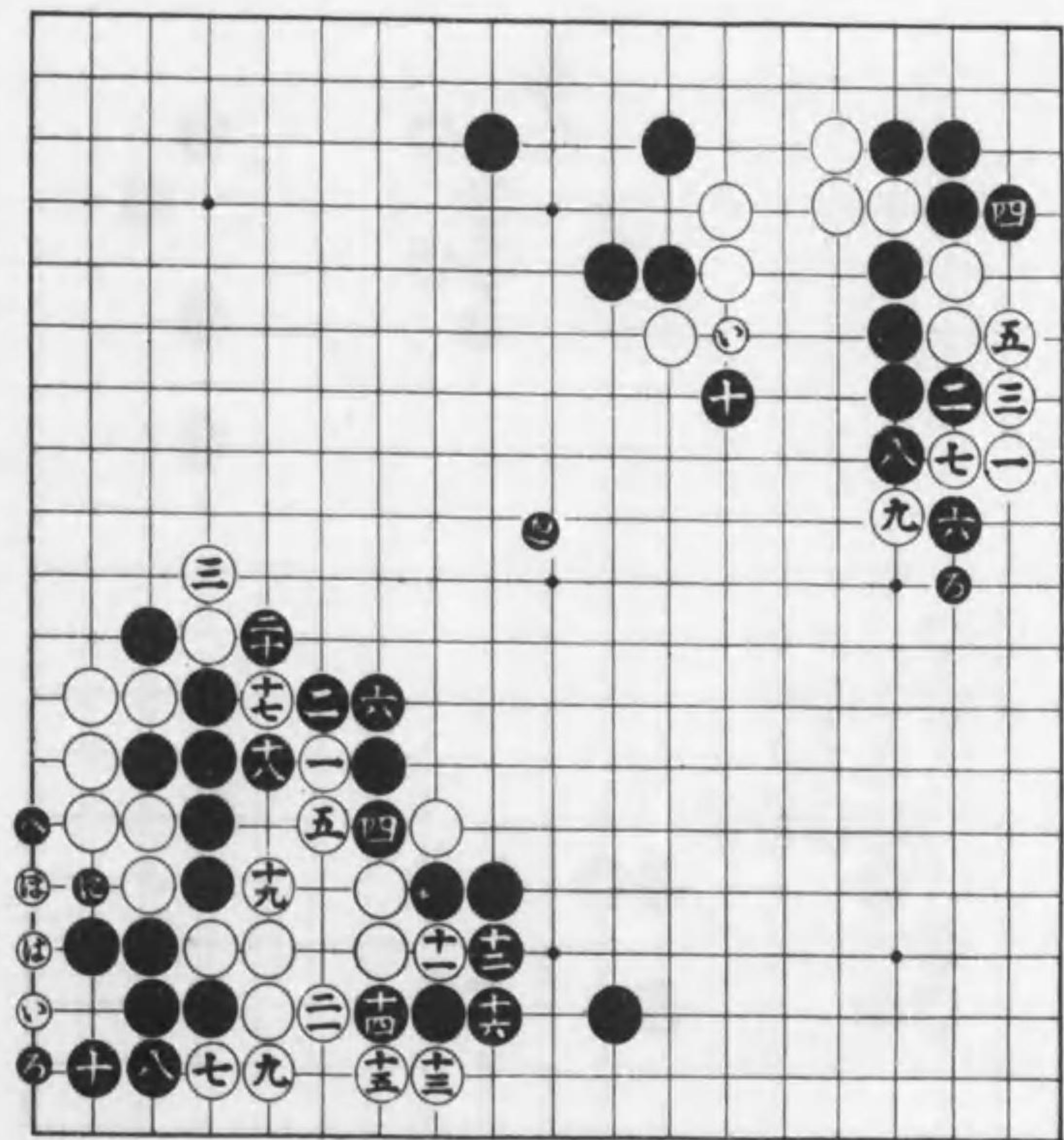
(第八八圖) 黒一と飛べば白二

以下は必然八迄一子を抱込まれるのは白を治まらしめて黒も稍不満足の形ですが白として勢力彙集の姿ですから九と押す事になれば黒は先づ不利無き結果として宜しい。

下隅は問題の白二の頂越です。黒九以下は假定ですがこれが根本であつて白二十の次に黒●以下の征の成否が得失の岐れ目となるこの征が白に有利ならば白二が成立し而して八と押すに限る理征白に不利ならば初め二の頂越しが抑々無理です。



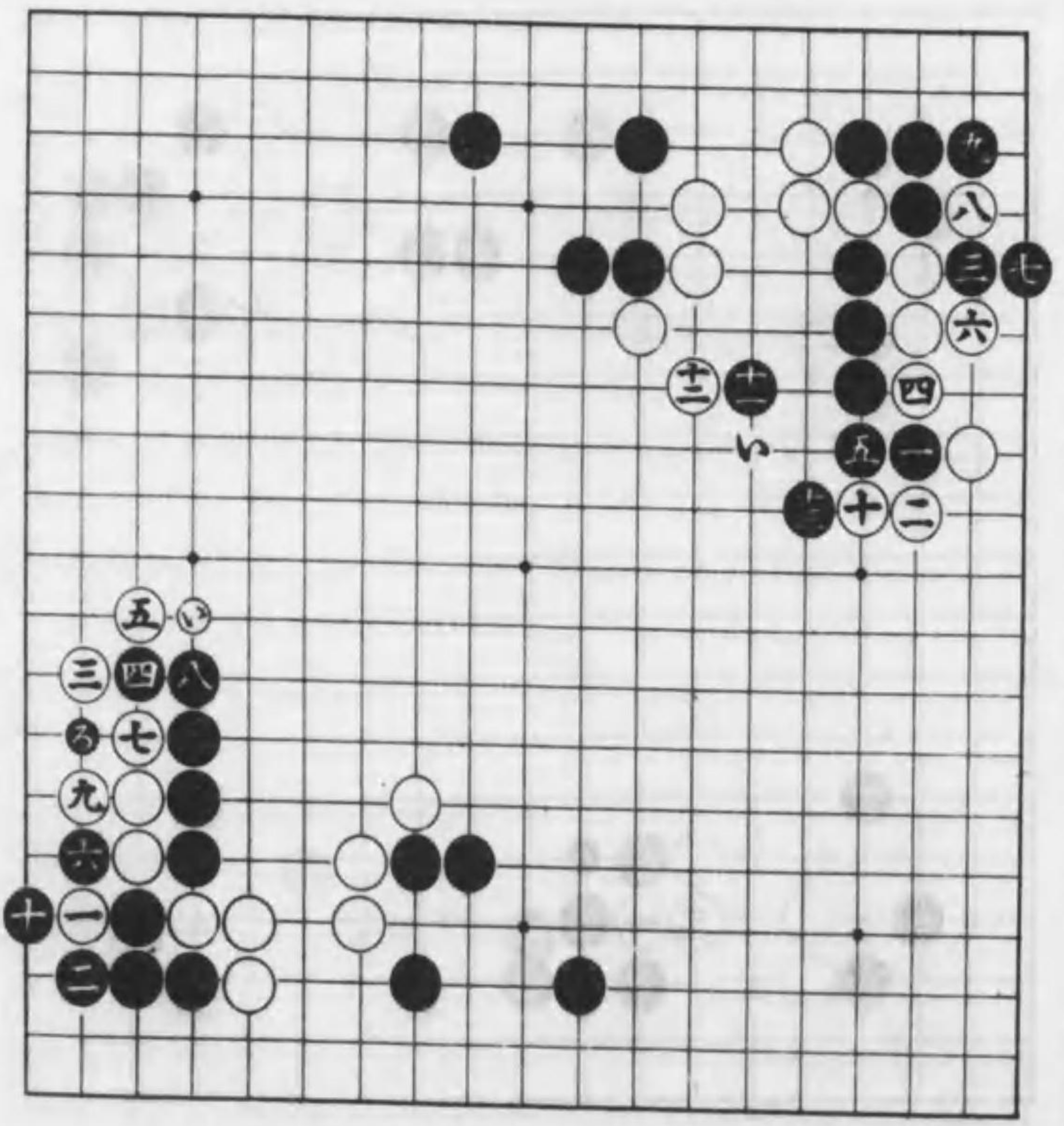
(第九圖) 前述の征關係白に不利なる爲二に押し得ず一と走れば黒は二以下の手順を追ひ白七九の出切に對し十と打つ妙手があります。白若し①と粘れば黒②と引いて萬事解決する。左下隅は白一と頂けて左右を凌ぐ策を講じたので、然しながら二一迄の結果黒は聊かも支障無き形である。勿論白が成功したものと云はれませんが、なほ白③と置いて來れば黒は④以下と應じて活路を保つ點切取られてゐる黒一子の效果に注目します。



(第十圖) 黒一と尖頂る變化

前圖に比し隅の黒地に差は無けれど外勢の相違が著しいのみならず中央の戦ひは紛糾を避け難き形で、黒一は感心しません。なほ黒十一はいに飛びたい姿ですが、飛ぶと白十三と行ひられて却て調子に狂ひを生ずる嫌ひがあります。

下隅白一は前圖上隅黒二四を嫌ひました。従つて黒四は今度は止むを得ず十迄必然です。この後白①は黒②に依ての劫味を残して筋違ひの意味あり、黒は極めて安全の姿であります。

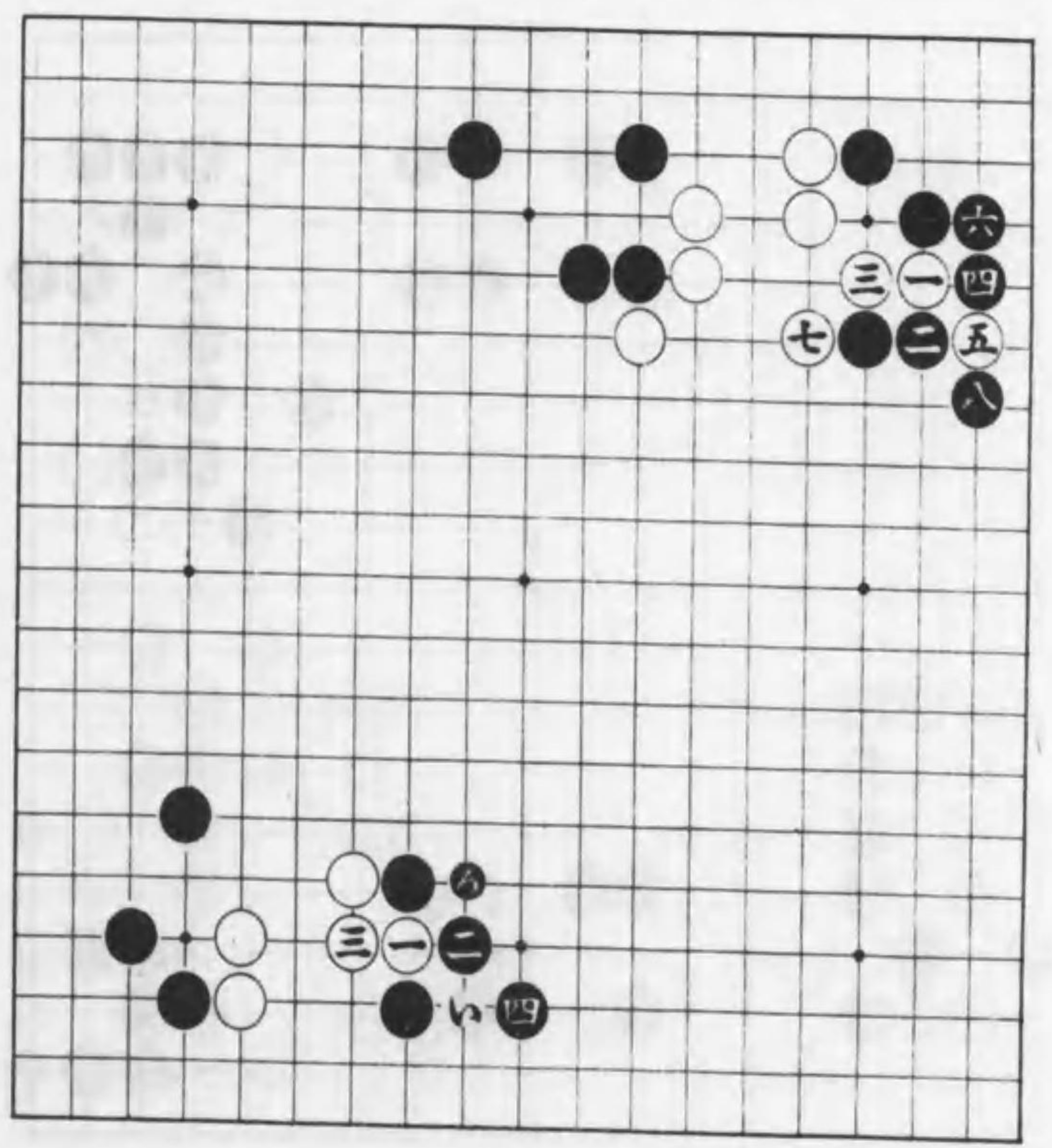


(第百十一圖) 第百八圖で言つ

た征關係が黒に不利であり若しくは紛れを厭ふならば黒は二・四と屈して盤る無事は無事なれど壓迫された形であるのは止むを得ません

白五は手順五にて單に七に縛れば黒八と備へられて後の味が無くなります

左下隅の如く白一と縛込めば黒は二と約へて四と掛粘ぐ四はいに堅く粘ぐ事も出来ませんが誤つてろの方を粘いで白いと一子を切取られ白に治まられて終ふのは黒が損です



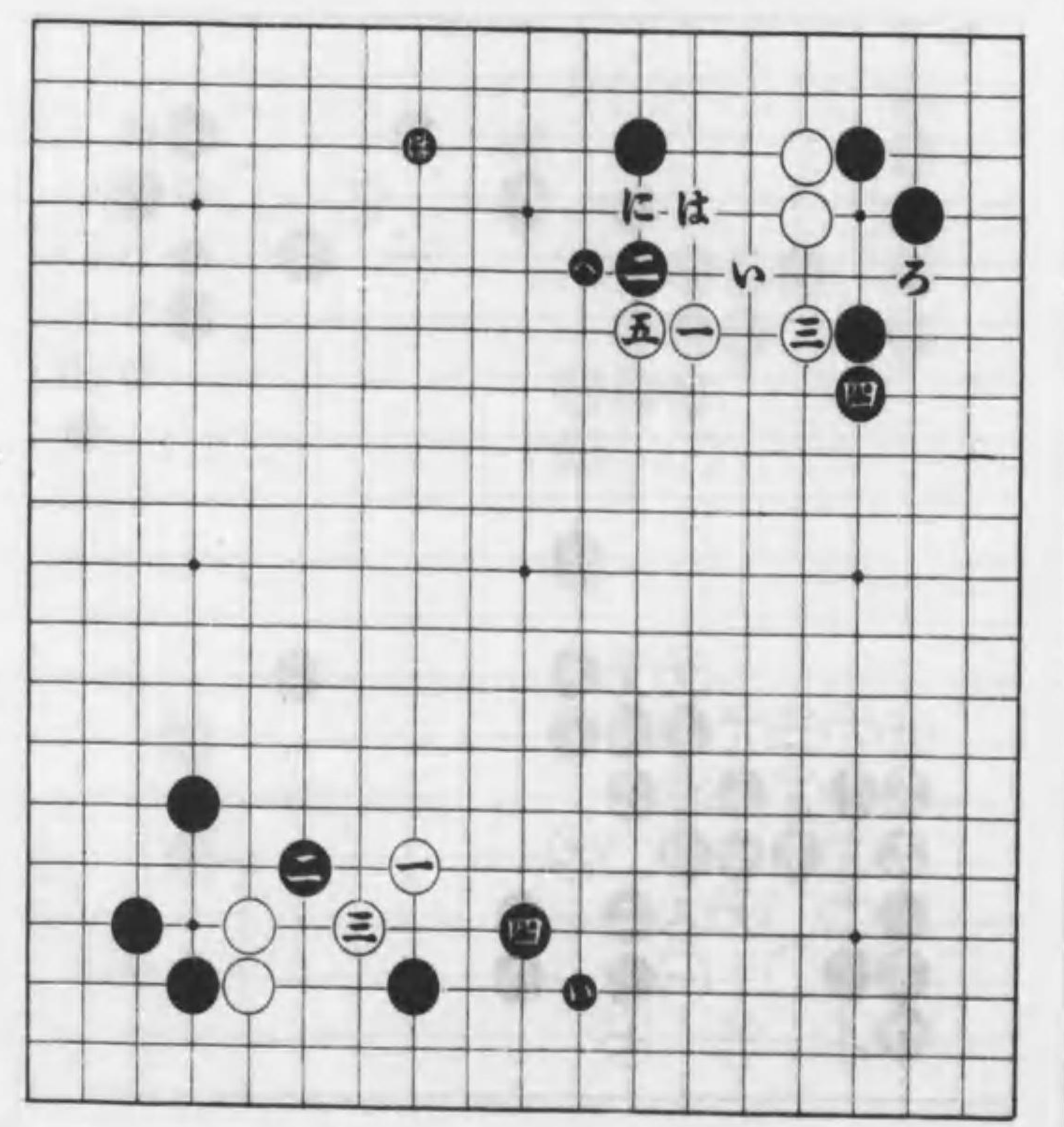
(第百十二圖) 白一と間を明け

て打つ事もあります

黒二と飛ぶに限るこれはいの置を狙つたのですが白三と頂れば黒四と自然に行びてろの頂越を消滅すべく又白三にてはに覗くも黒にと應じて有利である

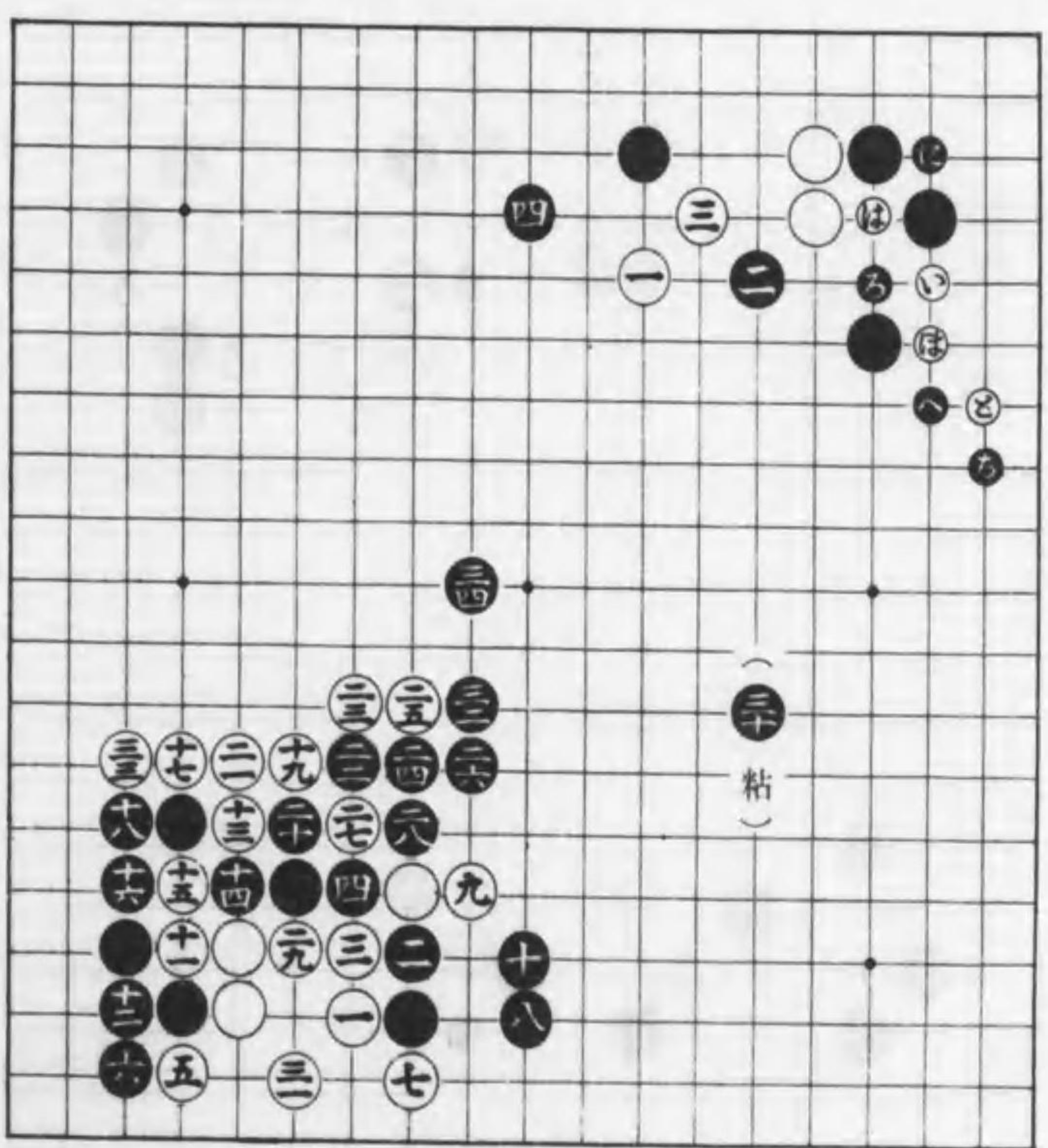
白五に次いで左上隅方面に白の勢力有らば黒と拓くべく逆に黒有らばと行びて宜しい

左下隅は白一と冠せる手段黒二にて單に四又はと應じ後に二の筋を窺ふとしても白一は感服しない形です四との取捨は右下隅の配置次第であります



(第百十三圖) 黒四に次いで白  
 ①と頂越して来れば黒は②の  
 二段縛に依て凌ぎます黒二は此  
 意味に於ても有力であり白一若  
 しくは三何れかを働きに乏しい  
 手と化せしめました。

下隅白一は上隅三と受けるの愚  
 形忍び難しとなし黒の意表に出  
 たのですがその可否は周囲の條  
 件にも依る故輕々に下す事は許  
 されません以下變化は多岐なれ  
 どそれ等を逐一示す事は定石の  
 本旨ならねば省略し最も合理的  
 なるものを掲げれば黒三四迄で  
 す。三三三三三三三三三三皆好點とされる。

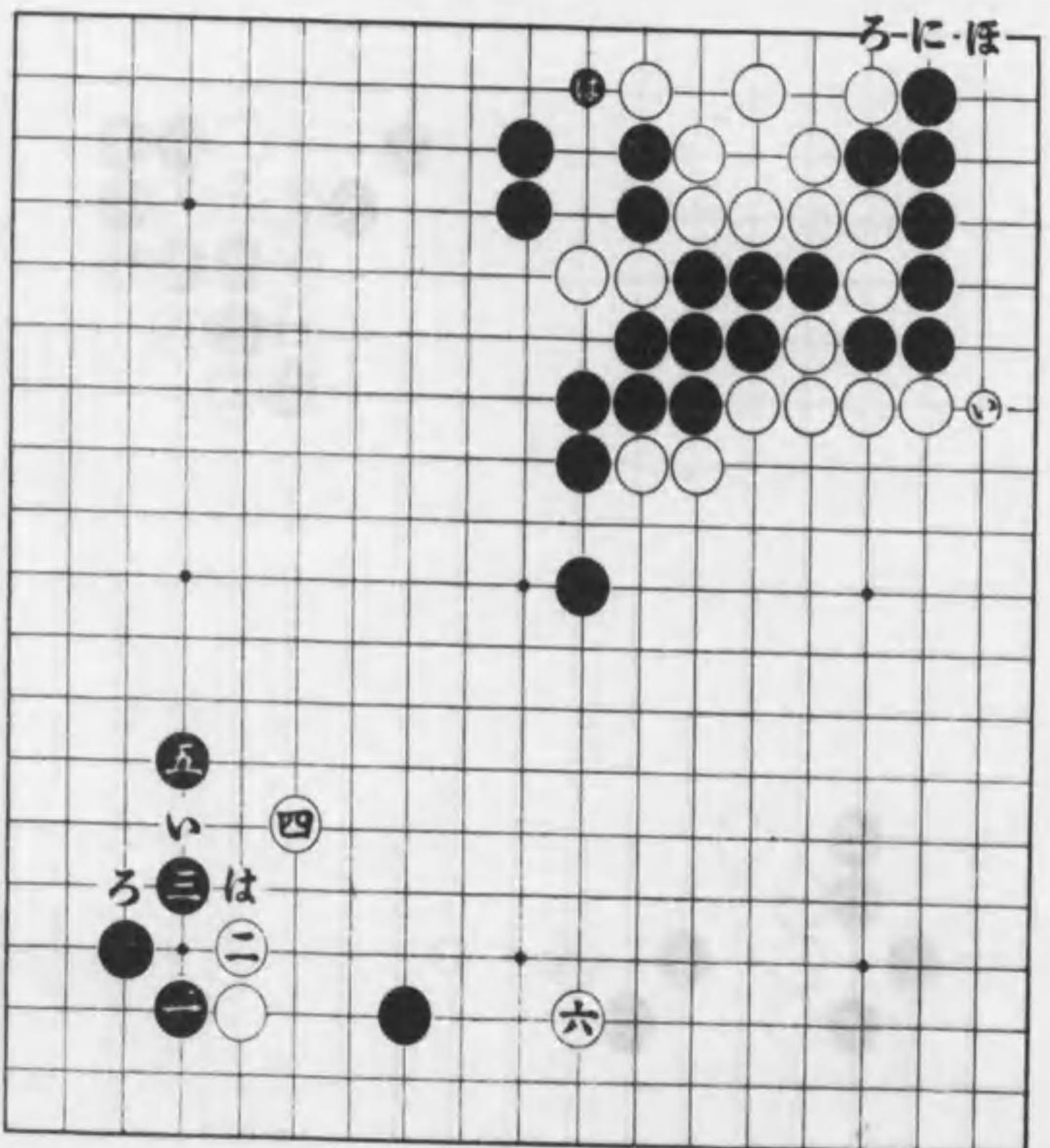


(第百十四圖) 前圖下隅の後に

白①を利かせやうとすると黒ろ  
 と縛ねられるし又黒も②の約へ  
 を急げば白に黒ほ白ろの縛粘を  
 先手で打たれます。

要するに前圖上隅白一が宜しく  
 ない筋である事を忘れてはなり  
 ません參考迄に掲げました。  
 下隅黒三と尖む型も有りますい  
 に斜走すると白ろの頂越しを窺  
 はれる惧れが有る點から三は堅  
 實なるだけに緩い傾きは免れな  
 い後の運びも拙いのです。

白四をはに押すは俗。  
 白六以降示すべき限りでない。



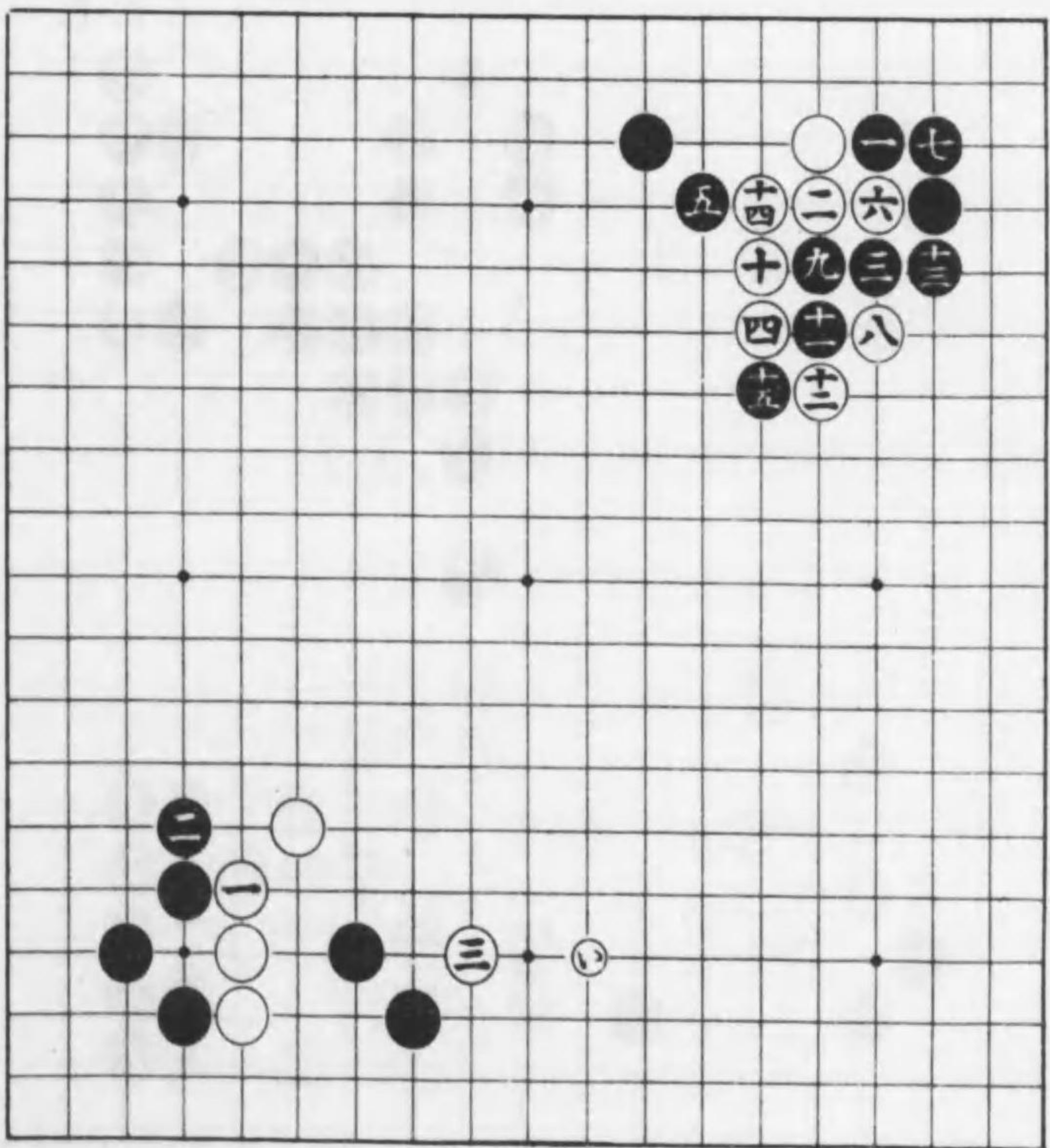
(第百十五圖) 黒五は白を九に

沿はしめて八と行び白四を愚化せしめやうとの心です。

白六八は筋には違ひなけれど黒十五と切られる事になつては稍無理たるを免れません。

左下隅白一と應ずれば無事その代り黒二と行びさせてその姿形を自然に整へしめました。

白三は⑤の邊りから迫るも有るべく右下隅の條件次第とします。従つて黒必ずしも有利とは言へず上隅二三の時に豫め用意あるべきであります以上通形百十五圖これを以て二間夾定石を擧る。



互先定石中卷(完)



昭和六年七月十八日印刷  
昭和六年七月廿三日發行  
昭和八年三月十四日再版發行

著作權所有



名人圍碁全集  
互先定石中巻  
非賣品

著者 本因坊秀哉

發行人 小川菊松  
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷人 和田助一  
東京市芝區金杉新道町十二番地

印刷所 單式印刷株式會社  
東京市芝區金杉新道町十二番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
電話神田四七・三二七・三三九六・四三三九  
板井口座 東京六二九四番

誠文堂

終